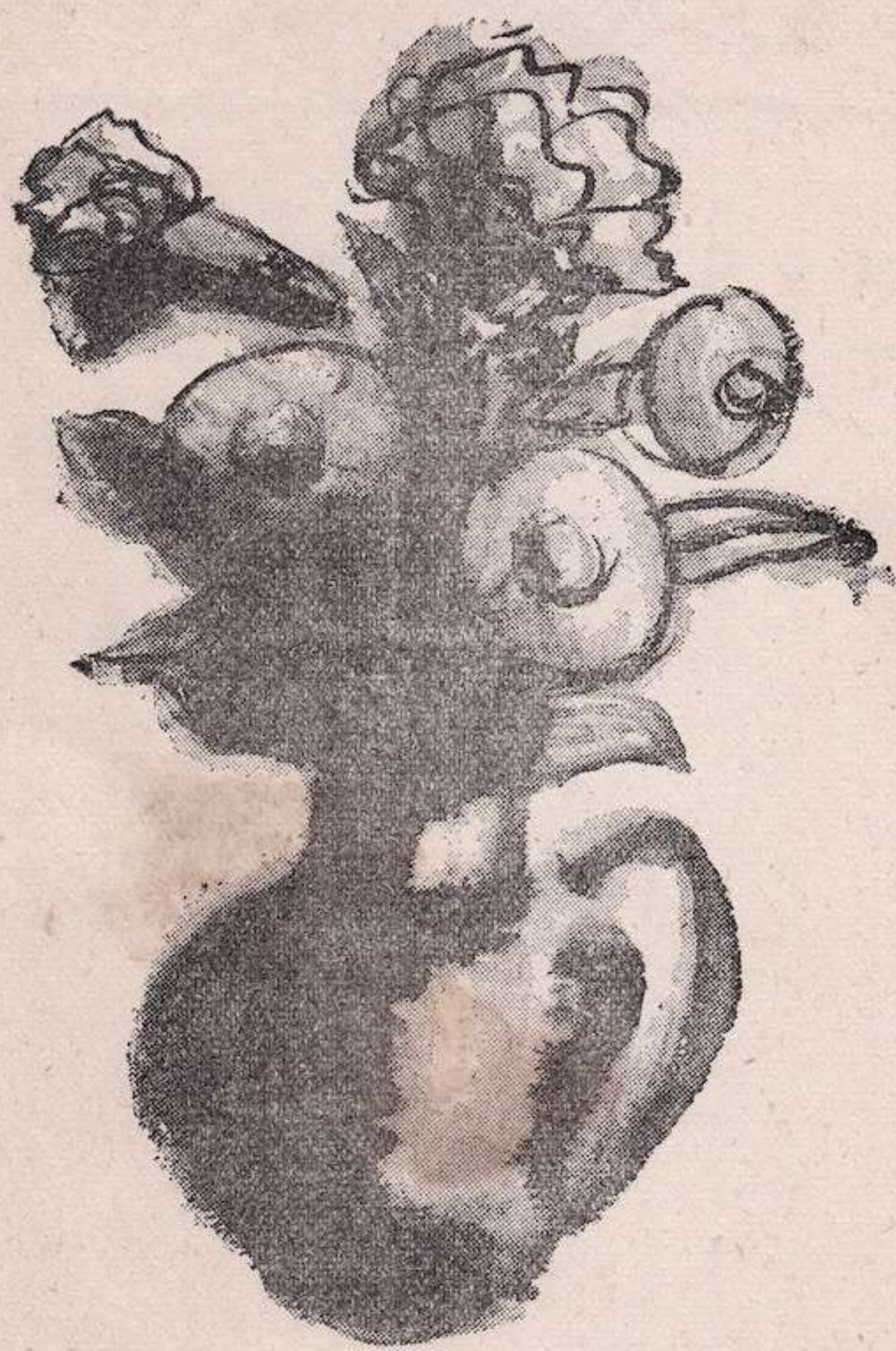


蹴 球

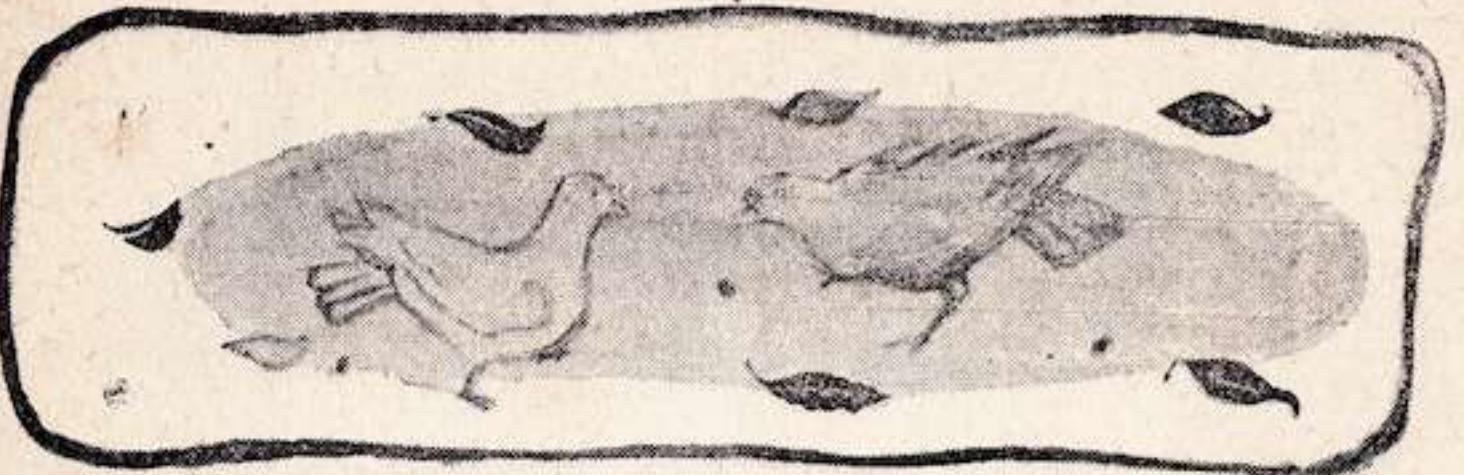
第 四 號

November — 1937

東京商科大學蹴球部誌

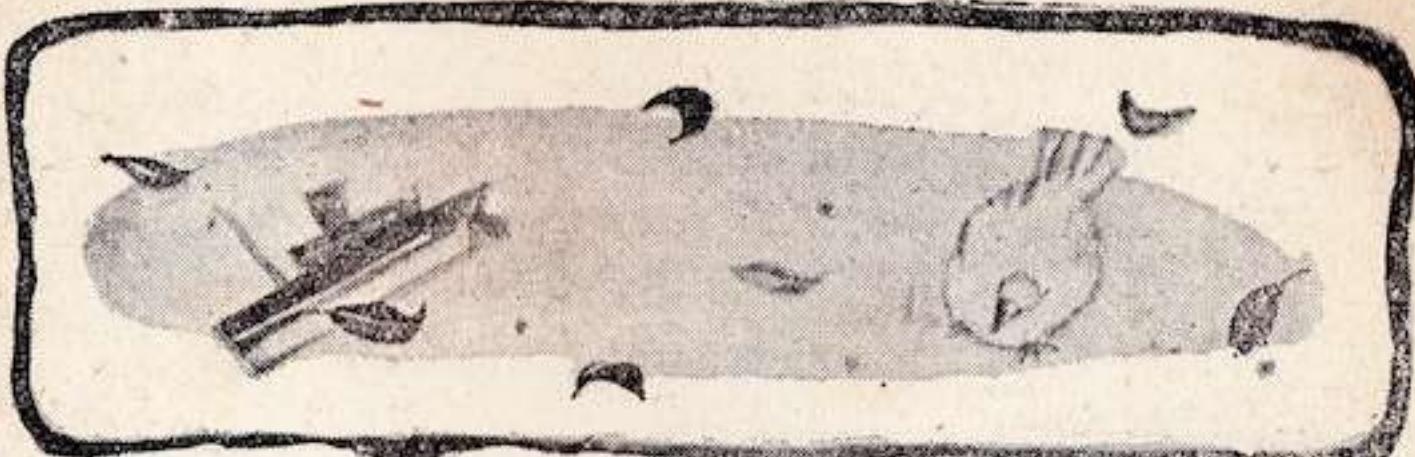
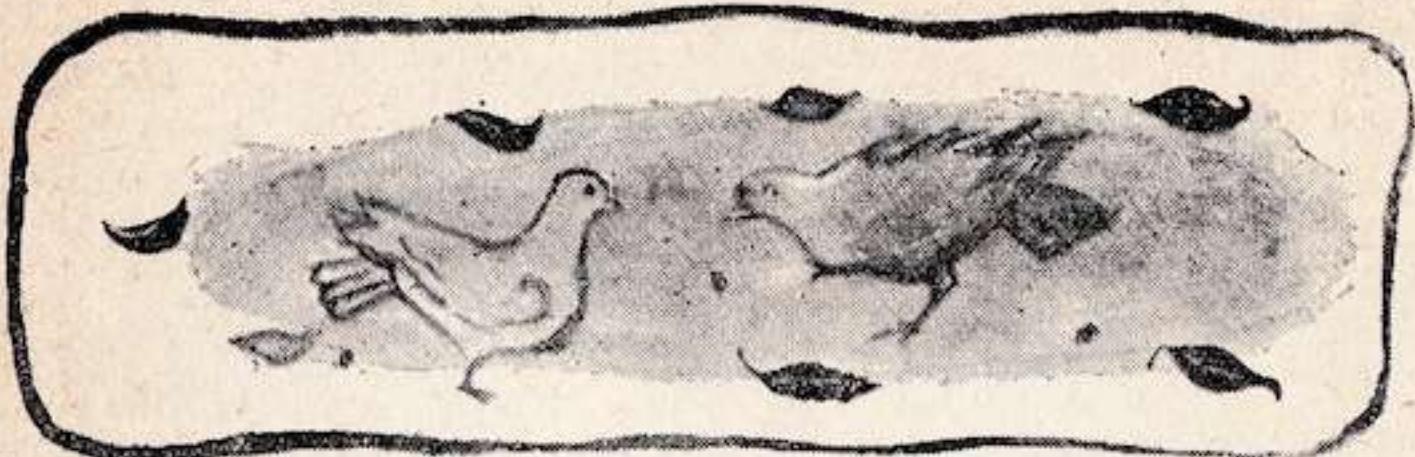


第
四
號



蹴球「第四號」目次

送 別 の 辭	五 兄 を 送 る の 辞	先 輩 か ら の 書 翰 集 (十一 篇)	▲ 先 輩 特 別 寄 稿	三 國 立 の 九 官 鳥	部 員 個 人 漫 評	無 建 設 の 道	題	三 制 勝 の 氣 魄	頭	寫 卷	蹴 球 「第 四 號」
送 別 人	送 別 の 辭	先 輩 訪 問 記		部 生 活 の 意 義		設	道	つ			目 次
送 別 人	送 別 の 辭			部 員 個 人 漫 評							
小 西	大 村	井 掛	▲ 送 別 文 集	先 輩 か ら の 書 翰 集 (十一 篇)		有 志 數 名	數	重 見 敏 之	見	鈴 木	
正 夫	恒 隆	影 久				三	三	三	彰 一		
	典 元	國 三				五	五	五			
	毛 云	元 三				七	七	七			
						八	八	八			
						九	九	九			
						十	十	十			
						十一	十一	十一			
						十二	十二	十二			
						十三	十三	十三			
						十四	十四	十四			
						十五	十五	十五			
						十六	十六	十六			
						十七	十七	十七			
						十八	十八	十八			
						十九	十九	十九			
						二十	二十	二十			
						二十一	二十一	二十一			
						二十二	二十二	二十二			
						二十三	二十三	二十三			
						二十四	二十四	二十四			
						二十五	二十五	二十五			
						二十六	二十六	二十六			
						二十七	二十七	二十七			
						二十八	二十八	二十八			
						二十九	二十九	二十九			
						三十	三十	三十			
						三十一	三十一	三十一			
						三十二	三十二	三十二			
						三十三	三十三	三十三			
						三十四	三十四	三十四			
						三十五	三十五	三十五			
						三十六	三十六	三十六			
						三十七	三十七	三十七			
						三十八	三十八	三十八			
						三十九	三十九	三十九			
						四十	四十	四十			
						四十一	四十一	四十一			
						四十二	四十二	四十二			
						四十三	四十三	四十三			
						四十四	四十四	四十四			
						四十五	四十五	四十五			
						四十六	四十六	四十六			
						四十七	四十七	四十七			
						四十八	四十八	四十八			
						四十九	四十九	四十九			
						五十	五十	五十			
						五十一	五十一	五十一			
						五十二	五十二	五十二			
						五十三	五十三	五十三			
						五十四	五十四	五十四			
						五十五	五十五	五十五			
						五十六	五十六	五十六			
						五十七	五十七	五十七			
						五十八	五十八	五十八			
						五十九	五十九	五十九			
						六十	六十	六十			
						六十一	六十一	六十一			
						六十二	六十二	六十二			
						六十三	六十三	六十三			
						六十四	六十四	六十四			
						六十五	六十五	六十五			
						六十六	六十六	六十六			
						六十七	六十七	六十七			
						六十八	六十八	六十八			
						六十九	六十九	六十九			
						七十	七十	七十			
						七十一	七十一	七十一			
						七十二	七十二	七十二			
						七十三	七十三	七十三			
						七十四	七十四	七十四			
						七十五	七十五	七十五			
						七十六	七十六	七十六			
						七十七	七十七	七十七			
						七十八	七十八	七十八			
						七十九	七十九	七十九			
						八十	八十	八十			
						八十一	八十一	八十一			
						八十二	八十二	八十二			
						八十三	八十三	八十三			
						八十四	八十四	八十四			
						八十五	八十五	八十五			
						八十六	八十六	八十六			
						八十七	八十七	八十七			
						八十八	八十八	八十八			
						八十九	八十九	八十九			
						九十	九十	九十			
						九十一	九十一	九十一			
						九十二	九十二	九十二			
						九十三	九十三	九十三			
						九十四	九十四	九十四			
						九十五	九十五	九十五			
						九十六	九十六	九十六			
						九十七	九十七	九十七			
						九十八	九十八	九十八			
						九十九	九十九	九十九			
						一百	一百	一百			
						一百零一	一百零一	一百零一			
						一百零二	一百零二	一百零二			
						一百零三	一百零三	一百零三			
						一百零四	一百零四	一百零四			
						一百零五	一百零五	一百零五			
						一百零六	一百零六	一百零六			
						一百零七	一百零七	一百零七			
						一百零八	一百零八	一百零八			
						一百零九	一百零九	一百零九			
						一百一十	一百一十	一百一十			
						一百一十一	一百一十一	一百一十一			
						一百一十二	一百一十二	一百一十二			
						一百一十三	一百一十三	一百一十三			
						一百一十四	一百一十四	一百一十四			
						一百一十五	一百一十五	一百一十五			
						一百一十六	一百一十六	一百一十六			
						一百一十七	一百一十七	一百一十七			
						一百一十八	一百一十八	一百一十八			
						一百一十九	一百一十九	一百一十九			
						一百二十	一百二十	一百二十			
						一百二十一	一百二十一	一百二十一			
		</td									



新入生感想集

昭和十二年度春季戰績

一橋蹴球部部員名簿

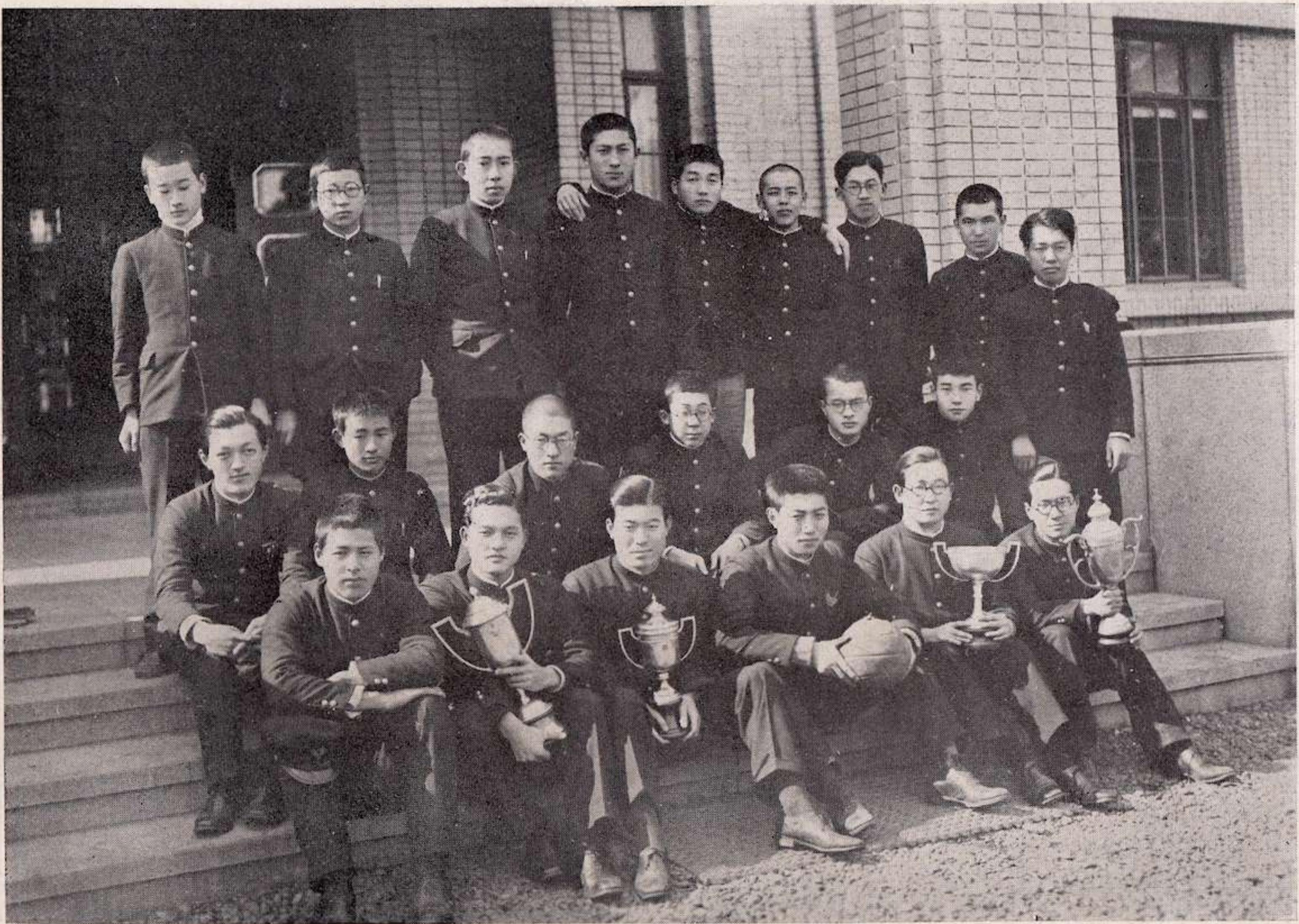
隨筆感想集



—大任果して卒業された五兄—

向つて右より森田・田島・角田・浅枝・荒井の五兄

昭和十一年度豫科記念撮影



前列向つて左より 早野・池尾・菅瀬・二階堂・狩森・米山
中列 金井・石割・宮崎・櫻井・吉澤・清水
後列 松岡・鈴木・吉田・片山・渡邊・茂木・堀尾・高橋・荒川

昭和十一年度記念撮影



高商大會優勝（甲子園運動場）



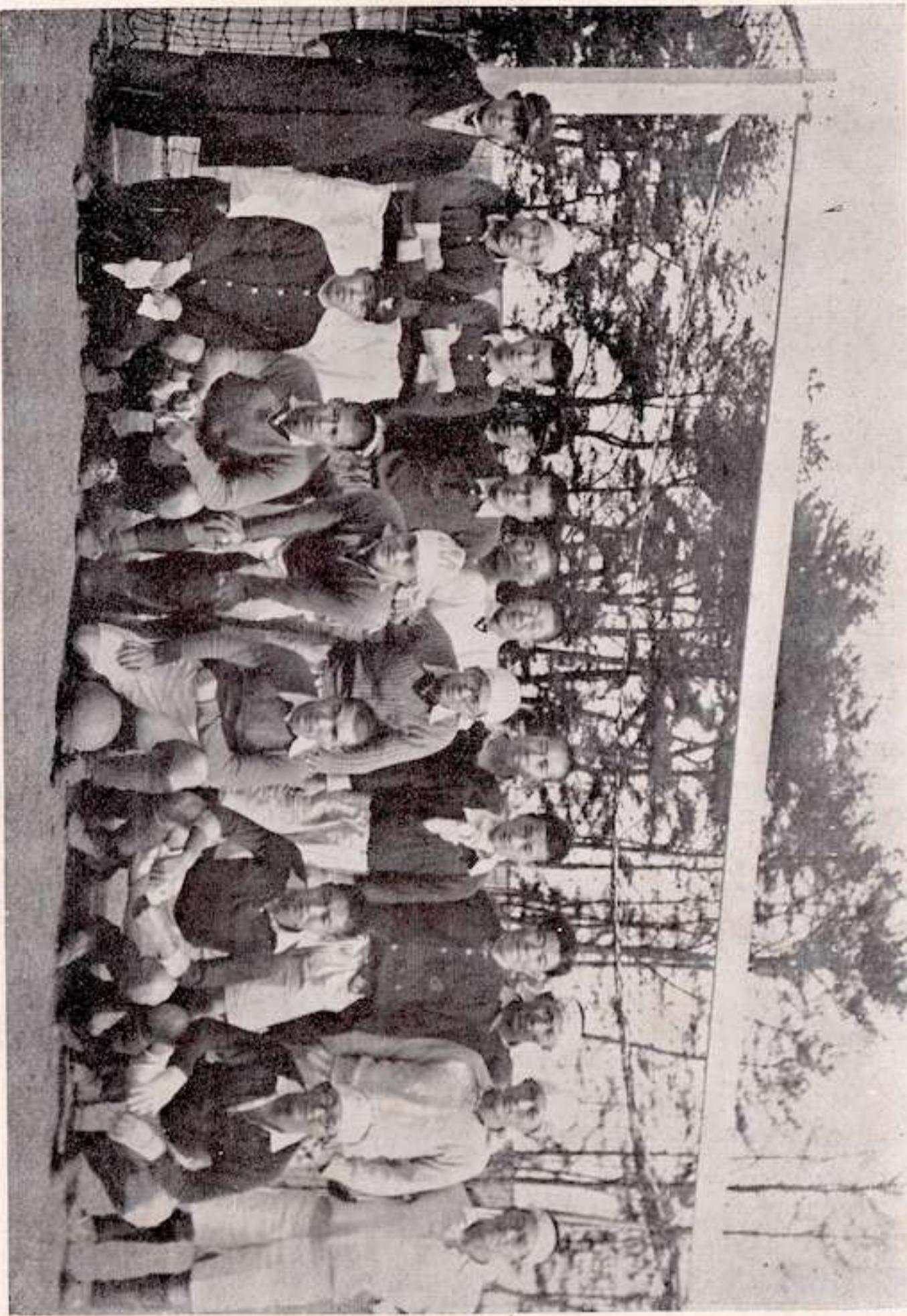
蹴球は勝敗を度外視した蹴球は許されない。
この信念が蹴球をやる全部だ。
蹴球はもつと素裸な血みどろなものだ。
各自いろく蹴球に付いて人生観を得られるのだ。
その中からのみ吾々は尊い経験を得られるのだ。
又それは絶対不可缺だ。
手がだ。一度グラウンドに立つた時、すべてを忘れてむきだしの蹴球
起をやれ、おとなしい蹴球は無意義だ。
死魂にもの狂ひで勝たんが爲にボールを蹴れ、
死もとより易し、身を捨てゝやる時
一氣死れ、
死魂でも蹴れ、
死もとより易し、身を捨てゝやる時
リ一死何物ぞ。

卷頭言

鈴木

木

華



高商大會優勝
(甲子園運動場)

一 橋 の 歌

空たかく光みなぎり

照り映えてさゆらぐ公孫樹

白雲の湧きたつところ

そここそは輝く聖地

これぞこれがわが母校懷しのふるさと

その名讃へてここに集ひつ

その名守りて永久にたゆまじ

あゝ一橋われらが母校

われ愛すいまぞ輝け

力充ち眞溢るる

意氣の子が榮ある行手

ヘルメスの導く學府

希望燃え生命あふるる

若人が赤誠き力に

建て築き繼ぎきし誇り

そは高く輝く文化

これぞこれがわが母校懷しのふるさと

その名讃へてこゝに集ひつ

その名かかけて永久に進まん

あゝ一橋われらが母校

制勝の氣魄

本三重見敏之

リーグ戦も「第一部」となると精神力だけでは駄目だ。相當の個人プレイを持たねばならないとはかつて考へた事であるが、同時に技術のみで勝負は決せられるものではない。

昨年の對慶大戦で商大が敗れた時、新聞は「商大は制勝の氣魄に乏しく云々」と評した。後で考へれば確かにそれが敗れた大きな原因の一つだと考へざるを得ない。それと反対の場合が帝農戦である。技術的に見れば殆んど問題にならない帝大を敗つたのは、農大が制勝の氣魄に満ちて居た爲で、帝大は農大には敗けないとその實力を信じ過ぎた爲、農大を輕視し、精神力に於いて農大に劣つた結果遂に名を成さしめたのである。前者は對手の力を過重視し、後者は輕視しきた爲に共に相手の調子に引き込まれ、自己の其れを充分發揮出来なかつたのである。

凡そ試合をやる以上勝たずば止まらずの氣概がなければ駄目である。大敵とみても恐れず、小敵に對しても侮らず、足りない所は意氣で補はねばならない。

昨年の對早大戦を考へて見よう。夏の合宿より打倒早大の目的を立て、ただ早大のみを目指して猛練習をした結果必ず勝てるると云ふ信念が全部員の心に生じたために、あの結果を生みだしたものである。必らず勝てると云ふ信念をもつてこそ勝てるのである。ただ口先ばかりで「勝てる、勝てる」と云つて居ても、心の中で「ひよつとする」と云ふ様な疑が

生づればそれは決して制勝の氣魄とは云ひ得ない。

「背水の陣を布け」とはよく云はれる言葉である。一旦志を定めて立上つた以上必らず勝つの覺悟が必要である。逃げ路を豫め準備しておいて事に臨む様なことでは何人も全力を發揮する事が出来ないのである。對慶大の試合でも之の事が云へる。「この試合に負けても一部に落ちない、農大に勝てばよい。」と云ふ様な逃げ路が考へられた結果敗れたのではなからうか。

名將シーザーの英國侵入軍がドーバー海峡を渡つた時に、彼は將卒に命じて海峡を越へて味方を運んでくれた船に火を點けて焼き捨てさした。「我が行く所必ず勝利あるのみ」の覺悟が大切だと云つても、實際心を誘惑する逃げ路があつては本當の覺悟は出來て來ないものである。そこで心が本當に定まらない者には是非とも背水の陣が必要になるのであり、彼が船を焼き捨てさしたのも、部下の將卒から誘惑物即ち逃げ路を奪ひ去る爲である。

同時に右の様にする事が本當に部下の氣持を一致させ、戦争に際しても必らず勝つたのである。今年のスケジュールを見て、假令帝大に敗れても明治と文理大に勝てばよいなどと思ふのは確かに逃げ路だ。あく迄帝大に勝たづんば部を解散する位の覺悟をもつて欲しい。

リーグ戦もあと三ヶ月に迫つた。帝大を目標とし、後に試合はないものと考へて夏の合宿に臨もうではないか。

三 ツ

本二岩崎寛貞

ルナルの日記の一節に、

「愚劣だ」かう云つてしまはないと劇場で楽しい一夜を過した様な氣のしない人達がある。「去勢鷄」の開演中に私の左の棧敷では云つて居た、「愚劣だ」右の棧敷では云つて居た。「素敵だ」

とある。諸君、此の句を味ひ、反思し給へ。我々の左右にさらに聞く事だ。だが「如何に味ひ深き事か」と私は思ふ。

(二) 生き方も色々ある。

世の中に正々堂々人として此の生を呼吸して居るものが何人居るだらう。君達はどうだ考へて見給へ。卑怯な生き方の中には所謂安心立命の境は見出せまい。併し、眞理の生活に志さんとする者に逆程の多き今の世の中に、眞の人としての此の生を呼吸して行く事は苦しみが多い。兎角、我々凡人は「お座なりの生活」にと卑怯な生き方に走る。それが最も苦しみの少い生き方だから。

苦しみに鬪ひ眞の生に向ふする努力は現實主義者には世迷事でしかない。然し、彼等の生活は無意味の連續に外ならぬ

のだ。そうでないか、諸君。

(三)

「満足した豚たらんよりは不満足のソクラテスの方が望ましい」とジョン・ステュアート・ミルは云ふ。

話の泉

吉澤君、某授業中、外の本を読むのに大きな聲の講義が邪魔だとばかりに耳に綿を詰めて栓をした。所が後で取れなくなつて醫務室へ行きました。

春の合宿では相撲がはやりました。皆痛さを我慢してヨイショ／＼。中でも一番張切つてるのは村さん。でも一番よく轉ります。横綱は何と云つても狩さん。吉澤君は名前の如く靖足で悩まして居ました。

蹴球部員中、此の所御不幸續き。淺田兄の御尊父。荒川君の御母堂。櫻井君の御尊父。鈴木(英)君の御令姉。

國立の九官鳥

二階堂晴三

九官鳥にはおのが聲が持てない不屈者である。國立の九官鳥は周圍が周圍で、啼けば啼く程嗤られるのだが――

○蹴球部生活は詩である。歌である。汲めども盡きざる泉に似て、わが心に悦びを與へる筈である。

○麻雀も飽きかけた。将棋も出来ぬ。碁も打てぬ。何をしたら良いか。蹴球部生活に詩を求める。敍情詩を求める。

○我が部の汲めども盡きない泉は、グランドにある。練習中にあのボール一個を追ふ心にある。

○ブレイが、戦術が、我が部の目的ではない。それは蹴球部生成本來の目的の枝葉末節である。しかしこの本來の目的に當つて必要なのはブレイであり、技術でもあらう。本來の目的に歩んでゐる人は、この事を識つて戦術を説いてゐた。

○日の下に新なる言葉が許されないなら、蹴球部も新しくはならない。古いものでもない。何時もかはらざる蹴球部である。

○「われに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」と壇上に立つた人が叫んだ。それより百六十年アメリカは健かに伸びてゐる。我が部は、共に健やかに伸ばしめたい否しなければならない。

○「雨竹風聲皆禪を説く」この氣持でゐたら練習方針も何も左程の苦にはならない。自分を内で生かしてゐるのは、見え

ないが外で生かすと蹴球部は成り立たない。内と外とは又餘り差のあるものもあるまい。

○小平と國立と異らうと、その差別を意識してゐたら途方もないものが生れて来る。それがどんなものになるかは、現はれて見ないと分らない様だ。

春の陽氣で九官鳥が狂氣じみて來るのも人間に醉興と云ふ言葉が櫻の下で許されるなら春だもの、許してやつて下さい。夏來りなば秋遠からじ、その秋を偲びつゝ。

話 の 泉

春のシーズンオフの會の前に、今迄の野球をやめて水泳をやらうと村井さんの提案。荒井さんは一層の事麻雀にしやうと云ふ。此の時横から森田さん「俺はドツチも沈むからよさう。」

×

キヤブテン鈴木さん、近頃試合中手癖が悪くなつて下級生から屢々怒鳴られます。鈴木さんに何時も御危介になつてゐる清水君も相當なもので練習試合の最中に敵方ハーフを軽く鐵砲で突き出しました。

部 生 活 の 意 義 再 考

豫 三 吉 澤 貞 雄

部生活を何の爲にやるのかと問はれた時、體育のためとか、趣味のためとか答へる人もあるであらう。然し色々の意味で最も伸びる時期にある我々にとつて、前述の意義のみにしては、部生活は餘りにも時間的に、いやそれ以上に體力の消耗といふ點に於て、大きな部分を占め過ぎてはゐないだらうか。

是の如き意義に満足出来なかつたが故に、今迄屢々「精神の修養」なる言葉が口にされたのであらう。

私は最初只漠然と球が蹴り度くて入部した。一、二ヶ月球を蹴つてゐると所謂「張りきり」をモットーとする部の緊張した雰囲氣を感じ、上級生等から部生活の大半の意義は「精神的なもの」に有るのだといふ事を何回も聞かされ、尤もだと只漠然と納得し、精神的な指針が定まつてこそ眞に張り切れるのに、只張り切る事によつて精神的なものが得られると、單純に考へこみ、半ば盲目的にやつて來た。

然しこれは最近に至り、もう一步つゝこんでこの所謂「精神的なもの」は一體何を指さねばならないかと言ふ事に考へ及ぼざるを得なくなつた。忍耐力、團結力、犠牲的な精神等々が最近まで漠然と私の頭を占めてゐた所謂「精神的なもの」であつたが、私はそれ等のものが極めて低い視野に立つて眺められたものであることを覺つた。即ち盲者が象の鼻に觸れてこれが象であると考へたのと同じ様な錯覚をしてゐたのである。

我々はここで人間の特質と、それに附隨して考へられる人間としての意義に遡つて考へなくてはならない。何故ならば部生活は我々の生活と全然離れたものでなく、従つて別個の意義を有し得可きものではないからである。

我々多少なりとも文化の恩恵に浴してゐる者が、野蠣人さては鳥獸と異なる所以は、我々が常により眞なるものを捕へようと思ふ理性が備つてゐる點にある。従つて我々がある環境にゐてその環境が有する道德觀とか常識とかいふものを、其の儘何等自分の理性の批判を下す事なく、受容れる事は情無い事である。

徒らに自らあげし首級の數多きを誇りとするは生蕃の常識である。しかしこんな常識の矛盾には我々誰しも容易に氣付く事である。

一方我々の社會に公然と行はれてゐる道德とか常識とかが、もつと高い視野から眺められた場合、當然我々が正しいと信じてゐたものが、全く眞なるものと相容れない場合があるかも知れない。いや我々と生蕃とが理性の差こそあれ、同じ人間なる事を思ふ時、こんな錯覺は無數に有る様な氣がする。

我々の特質が與へられたる理性に有る以上、眞に生き甲斐を感じ得る使命は、誤まれるものにして尤もらしき假面を被つたものゝこの假面を打碎き、與へられたる理性を研ぎ澄まして、眞の光にタツチする事であつて、殊に人類の福利に最も直接の影響を及ぼす倫理的、宗教的な問題に先づ突つ込んで行かなければならぬ様な氣がする。

しかして斯くの如き不動の根據に立つて始めて人間の眞の強さは生ずるのであつて、或る意味で良心的感覺の麻痺を表象する所謂「心臓の強さ」「神經の太さ」でもつて人間の強さを律する見解は完全に根底から破壊されて了ふ。

扱て私は今迄に私の信ずる人間の意義に就いて極めて大まかに述べて來たが、先にも述べた様に生活の意義と部生活の

意義とが不可分の關係を持つてゐる以上蹴球部の意義も當然以上の様な意義に律せられなければならないと思ふ。即ち私は蹴球部大半の意義は、是の如き眞實を求める課程に於ける部員相互の啓發にあらねばならないと思ふ。

我々は眞實を求めて思索する。そして當然起る行きづまりに對し、讀書によつて古今の哲人文豪が思索の跡を參照する。一方我々には、現在汗みどろになつて、練習に夢中になつた極は俺もなくお前もない渾然として一貫となつた氣持を分ち得る。極めてなだらかな友好を四十餘名の部員及び其の他幾多の先輩に期待し得る。この友好を基礎として、互に啓發し合ふ。私が現在蹴球部に處する意義はこれ以上でもなくこれ以下でもない。

(七月十八日夜終)

話 の 泉

今年も東京殘留組は又富浦へ。カンペイさん。狩さん米さんの二年連續出場組と、鈴木君、松岡君、茂木君、栗原君等の新人組。狩さんの艶話益々發展したさうです。その爲か麻雀も馬鹿つき。



個人漫評

本科三年

○鈴木 彰【府立一中】僕は鈴木彰。F.B 今年の主將です。蹴球と云ふものは一に練習、二に練習だと思つて居る。要するに俺は蹴球が好きだ。大好きだ。麻雀も好きだ。

○大掛隆久【東高師附中】僕は大掛隆久。F.W 附中を出て今一部で活躍して居るのは俺だけだ。一體蹴球をやると勉強が出来ない等と云ふ奴は誰だ。俺はチヤンと出来るぞ。

○重見敏之【神戸一中】僕は重見敏之です。マネチャード笛を吹いて居る。俺が笛を吹くだけで皆が自分から張切つてやるやうになつて貰ひたい。他人に強制されて張切る様では駄目だ。協會の方は出来るだけやる。皆も頑張つて呉れ。

○林田 穀【青島日本中】僕は林田穀です。E.W 中華民國山東省青島日本中の產。去年は腎藏なんでおどかされたが、今年はやるぞ。本三なんだから。ドイツと云つて苦手は居ないが唯一人虎公だけは鬼門だ。彼奴の脛は固い。此から頭の事を云ふとのぞ。

○淺田英三【京都一中】僕は淺田英三です。G.K 今年の春は親父一人が死んだので練習が全部出来

ず、非常にすまないと思つて居る。此からは出来るだけやるぞ。蹴球は理想ではない。黙つてやりたいんだ。そう思つて居ます。

○村井恒典【府立二中】僕は村井恒典です。F.W 背の高さでは部のトツプだと思つたが、鈴木の方が高いと聞かされて、實に口惜しい。今から延ばせば延びるかも知れないが、と云つて此れで最後の秋だから、その延びる力をリーグ戦に使つちやへ。帝大は勿論、慶應だつて豫科がのしたなもの、俺だつて五六點入れるぞ。

本科二年

○岩崎寛貞【府立二中】僕はカンペイです。H.B 近頃よくどなられる。皆が僕の巧くなつた事を認めて呉れて色々言つて呉れるのだと思ひます。二中の乾分が殖えて嬉しいです。

○小西正夫【廣島高師附中】僕は小西です。H.B 蹴球をやつて五年、四年や五年では蹴球が分つたなんて云へないと思ふよ。僕の様に色が黒くならなくては駄目だよ。

○後藤虎雄【湘南中】僕がトラです。F.B 俺と當る奴がよく負傷するが、あれは俺が悪いんじやないよ。ボヤ／＼して居るからさ。マサカ虎に見込まれた兎ではあるまい。もつと眞面目に蹴球をやらう。

本科一年

○二階堂晴三【廣一中】(H.B)

草深き國立の、ハリキリボーア二階堂

名はセイソウと申します

腺病質といふけれど

熱と意氣とにあふれてる

その肉體のたのもしさ

○米山大三【府立五中】(委員長)

名は大三といふけれど

小つぶな委員長ハムライス

理性の強いその氣質

議論をすればどこまでも

反対してくるその自信

責任重きキヤブテンの

好き女房になつてくれ

○池尾隆二【府立五中】(F・W)

足の太さはNO・i

シユートのスゴサもNO・i

喫茶店の片すみで

しんみりレコード聞くような
やさしい一面も持つてます

ギリシャの彫刻にあるような
隆々たる肉體美

○狩森正雄【上野中】(G・K)

熱情のあふれたその體
飯を食つてゐるその時の
うれしさうなその笑顔
よく腹をこはします

こはさぬよう氣をつけよ
富浦の夏はアツイです

○菅瀬十朗【府立五中】(F・W)

心の中では色々と

考へてゐる事もあるそうな
まだ先は長い頑張らう
遊ぶ事は遊ぶけど
授業にはよく出てゐます
島の思ひ出深いです

○吉澤貞雄【飯田中】豫科最大の傑作の持主です。慌てゝ女湯に闖入して、吾々を恥づかしがらせた事もあります。又小平の田舎に住んで居りますので、たまに都に上ると胸がワクワクして切符を何處に入れたか忘れて、人々の前でボケツトの底の塵迄で見せるといふ奇妙な病氣を持つてます。常に頸紐をかけたやうにヒゲをのばして、ブルーベルの爺さんに褒められます。ゴールキーパーとして、豫科の主將として大いにファイトを發揮して居ります。試合中物凄いセーヴィングをやつてよく水をのまされるです。どうぞ宜しく。

○堀尾貞一【神戸一中】豫科の委員長として、吉澤の女房として活躍して居ります。部員多しと雖も女形として、彼の右に出る者は先づありますまい。ナヨノヽとした腰つきで部費を請求されるとついフラヽとして、日頃の滞納者も財布の口を開きます。それで居て試合には倒れる迄やります。慶應との試合で完全に二宮をマークして、二宮に褒められました。又電車の中で首を長くして仲間の數を計算し、四人の組を作るのが最大の得意です。H.B

○金井雄吾【神戸一中】三年生ともなると餘りころがりません。豫科三年一のシャンとして、イキゾチツクな顔は定評があります。(食堂で頼みますぞ。) 寮に居りまして、同室の荒川等に獨逸語を教へる心臓を持つと/or>。又豫科で一番服の汚れて居るのも衆知の事實です。W

○荒川守之助【宇都中】シツシン中學はウーツノミヤ中學です。荒川守之助とは一寸イキでせう。(誰だ。牛太郎にそつくり等といふ奴は) 胸底深く猛烈なファイトを持つてゐますが、試合前にパン等食つてフラヽする事もあります。又タツクルの凄い事、相手を完全にノリマキにするです。大根オロシの異名を持つてゐます。大切な體だ。自重してくれ。H.B

○吉田富彦【神戸一中】豫科三第一の坊つちやんです。嘗て鼻下長カタルを病んで、鼻の下が常人より少しタツブリ出來と/or>。オナゴを見てデレヽとなるのが不安心です。ウイングをやつて時々後藤兄の凄いタツクルをくらひまして、此の頃大いに進歩して、今度は後藤兄を何となくスルリとカモります。W F.

○清水睦【府立八中】部で一二を争ふ駿足。阪神パークに近しい親戚を持つ事を無上の誇と致します。麻雀、撞球、と仲々趣味が廣いです。又相當な酒豪でちつとも酔ひません。近頃餘り肉ばなれもせず、靴を持つてノコヽと走る事もない。試合でよく點をきめるよきオノコです。F.W

○石割知之【開成中】清水と同級ですから麻雀、撞球に熱中しとるです。一年の時からアンパンの名で通つて居ります。よきサブとして常に吾々の模範となります。會計委員長として、又部誌の編輯等御苦勞様です。

○高橋道太郎【府立五中】ヒゲの叔父さんとして有名です。又猛烈なファイトの持主で、危機に臨んで益々はりきります。食堂のメツチエンや小使の叔母さん達と仲よくなつて下級生等をひがませます(俺達は何でもないがね)又他に女の子がありまして、若い者に毒になる様な話をするです。大宮公園でヨタ者を驚かせた氣の強さです。B

○早野廣太郎【府立五中】豫科三年隨一の好體格の持主。でも至つて氣はやさしい方で……豫科リーグにはセンターハーフとして大いに頑張りました。バツクアツプの早い事驚嘆せざるを得ないです。部で一番の悪舌家。彼がしゃべると皆ビクヽとしてゐます。それ程彼の言葉は辛辣で、本科生等もタヂヽです。H.B

豫科二年

○松岡義彦【府立八中】何處となくボーツとして居る男だが、仲々鋭い所がある。彼のあの美事なフットワークには誰も驚かされる、近頃は髪をのばし、とても色氣が出て来ました。もつと氣を強く持てば将来大したものになりさうです。F.W

○茂木利孝【府立五中】彼のあの弾丸的な兩足を揃へての猛烈なタツクル、全くファイトに満ちたものです。體が小さいので何處から飛んで來たのか判らないさうです。左のキックも少し練習して下さい。春に寫した時の寫眞の顔はスマシタのださうです。

○宮崎豊治【府立二中】寛ペイさんの後輩です。あの雲助の様な體で萬歳式タツクルは堂に入つたものです。高い球が苦手らしい。何時でも彼のシャツは胸の所だけ真黒です。熱心の賜物だ。

○鈴木英二【府立一中】年が若いが、しつかり者。フォアワードで活躍して居る。最近頭をのばし始めたと思つたら、のろけばかり。富浦では一番張切つたさうです。その意氣で頑張つて呉れ。

○片山光夫【廣島一中】廣島の海賊の子孫だかどうか知らないが、鬼と呼ばれし豪の者。然し彼のバイクは虎の皮では無いさうです。最もふんだんに毛があるからバイクの必要は無いさうです。(失禮)最近バツクからフォアワードにノツソリ出ての彼の活躍は目覺しい。

○櫻井孝次【神戸一中】アダナはダーボーだが仲々スマートボーイだ。柔かい中にも又鋭さがあり、彼の出足のよさは有名だ。ニヤ／＼して居るので、人から目縋に何とかだと思はれてるが決してさうではないですぞ。

豫科一年

○清水和雄【府立二中】カンペイさん、宮崎君の後輩で、仲々おとなしさうな人で一寸ニヤ／＼人の顔を見て笑つてる様だ。それでも試合となれば大いに張切るです。頑張つて呉れ。H.B

○藤塚亮策【府立五中】仲々好い體格の持主で、キックも仲々いいから、今後もつと練習に熱心に練習に精進すれば上達疑ひなし。今後自重してくれ。F.W

○居川達一【廣島一中】部に多くの先輩を有する廣島一中の産だ。酒を飲むとよく、うで蛸見たいに赤くなつて延びるです。キーパーをやつて居ます。上脅がある上に中學時代にバスケットをやつて居ましたので仲々器用です。吉澤君なきあとの豫科を頼みますぞ。G.K

○山形 登【神戸一中】おとなしい、堀尾の二代目といふ所。別の名をセミと云ひます。堀尾おじやうにならつて大いにファイティング・スピリットを養ひ給へ。F.W

○淵上 明【府立二中】おとなしさうな人だが練習マツチで當つて、その強さに驚いて、相手がもう一度顔を見直すさうだ。今後の精進を期待します。F.W

○岡田 昇【廣島一中】彼も又名プレイヤーの多い廣島一中の産で、眞面目に努力する人ですから、とてもいいシュートを持つて居ます。今後は動きを研究すればフォアワードとしての君の活躍には期待出来る。F.W

○水島 行【濱松一中】昨年の主將水島兄の弟君。物凄いファイトの持主で、又蹴球も仲々上手です。早野に次ぐ悪舌家で、心臓の強い事は衆知の事。本人はそれ程にも思つとらん様子です。

○村木杉太郎【高津中】大阪府の出身で、體軀堂々たる人です。でも一寸妙な癖がありまして、鼻

の下の長いのが氣になるのか、談話中始終なでゝ居ます。キツクもいいからフルバツクとして活躍して居ます。綽名は近衛さん。

○栗原 国【府立五中】別の名をヤギ、或は天神と呼ばれて居ります。あの顎の下のヒゲで富浦では大分女の子に騒がれたさうです。これからも大いに練習に努める由。頑張つてくれ。

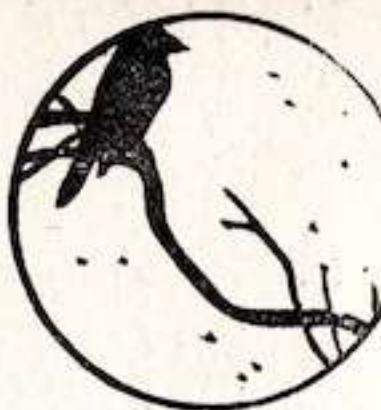
○根本 大【府立一中】名の如く體格大なる人。キツク等も、もう少し練習すれば、ファイトもあるから立派なプレーヤーになれる。しつかりやつてくれ。

○建部正一【湘南中】ゴツツアンの後輩として彗星の如く？ 現はれた人。プレーの方も相當経験あるはうだから、今後は強引な所を見せてくれ。

○宮澤 力【屋代中】信州の山猿と自稱する元氣激渉たる人。人呼んでホルモンと云ひます。理由はタネさんと同じ所から出て來たのでせう。體格も堂々たるものだし、ファイトも旺盛だ。今後も熱心に頼むぜ。

○山田久寧【宇都宮中】今年の夏の合宿から入部した荒川君の後輩。でも彼獨特の宇都宮言葉はきかれません。始めて蹴球靴をはいて痛さを我慢をして歩けなくなる迄頑張つてくれた。その元氣で今後練習してくれ給へ、幸ひ體格もいいからしつかりやらう。

○渡邊 健【神戸一中】今年は事情があつて練習には出て来れないが、部員として背後にあつて大いに努力して居て、皆の感謝的となつて居ります。來年は是非頑張つて下さい。



特別寄稿

無題

先輩 水島茂

大分以前に部誌の寄稿を依頼された。よし今度も何とかひねり出して書いてやらうと思つて筆を執つて見た。然しさて書くとなると仲々材料が無い。蹴球生活からかれこれ一ヶ年半遠去つて居るので無理もないとは思ふが、その上生來文才を持合せて居ない爲筆が少しも進まぬ。無理に思索も纏めやうとして居ると、隣の部屋でダンスレコードが始り出す。向ひでは麻雀戦酣でバイをえらい元氣で叩いて居る。「そら三翻四翻だ！」「でけえ!!」と八釜しい事。薩張り落着かないので「また明日」と止めて了ふ。翌日は夜業で月光を浴びて歸る。……で何時の間にか延びくになづてしまつた。

又もや最近米山君から催促を受けて何とかしなければならぬと、勇を鼓して蒸暑い部屋で蚊にくはれてながら筆を執つ

た。矢張り同じ事で少しも考へが繰らぬ。仕方が無いから繰らないなりにも繰めたのが以下の駄句だ。部誌向きではないと思ふが御了承願ふ。

偶々會社から早く歸つた。七月十一日から夏の間會社も四時ひけといふお觸れが出来たので、五時を廻つた頃には會社を出る事が出来た。久し振りで明い間に寮へ戻つて一風呂浴び一日の汗と埃を落す。實に氣持がいい。はじめて自分の身體に返つた氣持でのびくとする。浴衣がけで……この浴衣は此の間或る染色工場を見に行つた時貰つたものだ。「疵物ですが」と云つて呉れたので、疵物かと思つて氣安く貰つて來たのだが。立派な反物だつたので後で恐縮した。此は「神風浴衣」と銘を打つて其處から賣出し、時機に適して大當りとなり、目下その生産に大童になつて居るとの事。物事も一寸した所で斯く迄成功するものかと感心したのだが「神風」が倫敦へ安着のニュースが入ると同時に朝日新聞社へ駆けつけた所で大阪商人のスマートな處が分る。一事萬事大阪商人の面目を發揮して居る……脱線したて權利を得たといふのだから、大阪商人のスマートな處が分る。一事萬事大阪商人の面目を發揮して居る……脱線したがそれから夕食を済ませて娛樂室へ休息に行つた。ラヂオが北支の風雲急なるを告げて居て、第一補充兵役の小生を此の上なく緊張させた。大阪からも毎日の様に萬歳の聲に送られて出征する勇士がある。心齋橋や阪神電車の梅田驛その他人通りの多い處では千人針があわただしく往來する人の氣をひきつける。將に非常時だ。緊張した氣持でニュースを聞いて居る。それから何かの歌謡曲だ。音樂を聞きながら再びくつろいだ氣持でアサヒスポーツを何氣なくめくつて見て居る。どうも見た様な顔が並んで居る。「オヤ?」と思つてもう一度よく見なほした。見た事がある顔も道理、大きなカツプを抱へて居るのが吉澤だ。早野、ヒゲ、キートン居るく。吉田の丸坊主が光つて居るし、といふわけで豫科諸君の元氣な顔を思ひがけない所で發見して本當に嬉しかつた。

全關東の大學生科を軽く一蹴して覇を唱へた諸君の得意もさぞかしと思はれる。此れで吾が商大蹴球部の將來も一段と輝かしいものになつて御同慶の至りだ。豫科チームの制覇は今秋のオール一橋軍一段の活躍を約束するものと思はれる。

此處迄書き續けた處突然召集令を受けた。もう書き続ける餘裕が無い。三十一日三島野戦重砲へ入隊だ。頑張つて来る。サツカーで鍛へた體だ。決してひけはとらぬつもりだ。

建設の道

先輩田島輝重

顧れば過去六年の蹴球部の生活は長瀬先輩の指導下に出發した部再建の歴史であつた。

建設者の熱と努力、愛と苦惱と、まさしく見せられて、吾々は次第にその眞劍味に魅せられて了つた。

ツショーンの燃えるがまゝに働けばよかつた。しかも尙吾々は市井の労働者と異なる。何故ならば、吾々には、長瀬兄の抱く指導原理がその儘心の中に再生されてゐたから。とまれ幾多の好後繼者に恵まれて部再建の事業は殆ど完成された。

當時無組織なるが故に、無統制なるが故に、個人的にのみ先輩は存在した。長瀬兄は此所にも肅清の風を吹き込まれた。

元來身體の弱かつた長瀬兄があれ程、元氣に、熱心に働かれたのは實に、その節制と養生にある。それはとりも直さず強き意志の賜である。

私には六年間の球友五人の中に名を連ね、存分の我儘を許されて卒業した。

部誌四號を迎へるに當つて、吾々は先輩團組織化への努力を誓ふものであり、既に準備は進められてゐる。

蹴球部建設の大業も、先輩團の組織完成により一往繰りがつくと思はれる。

然し先輩の組織は如何に強くても、もろいものである。此れに粘りを與へるものは在學部員諸君の力である。要するに最もよき完成であるのだ。

助け合ひの強みを出すのだ。

とまれ「賣家と、唐様で書く三代目」とか。建設は易く守成は難し、といふ觀念は此れを改めなければならない。

全ては建設の歴史であらねばならぬ。進歩の歴史であらねばならぬ。建設の基礎を固くしてその大業を進める事こそ、最もよき完成であるのだ。

檜舞臺での活躍を期待する。

(二)

「ローマは一日にしてならず」

(三)

縁の下の力持が一番必要なのだ。

檜舞臺は華かだ。結果如何は最大の關心事だ。しかも尙舞臺の蔭の力は結果に關係するキーポイントである。サブの力により舞臺が廻る時が来るのだ。

僕は入社以來四ヶ月、フリーランサーとして働いて居る。これから仕事に男子一生の大業と思はねばならない。その爲にはスタートでの基礎準備には何ヶ月を要しても無駄でないと思はれる。

大組織の下に働く人の弱點として全體的觀察力の涵養が足りない事が屢々言はれる。

完全なる組織の下では所謂サラリーマンは自己の職分を覚え、それを守る事に汲々とする。

一方吾々の會社の如く組織の死んでゐる所ではやゝもすると長瀬兄のいはれる青年將校の輩出となる。吾々は所謂サラリーマンタイプには嫌悪を感じると同時に青年將校的存在でもありたくない。

フリーランサーの一年は唯静かに會社を觀察し、修養を積み、根本精神を利己心を没却した力と技、智と腕の協調に置く事を要望されてゐる。

吾々は技術屋、事務屋と別に考へたくない。二者は共に面を異にする技術屋であり、事務屋である。されば五體觀よりすれば吾々は技術屋である。

吾々の立場からは資本の支配なる觀念が極度に薄められてゐる。かゝる形態の經營に於てこそ勞資の對立は減じて行くのだと考へて居る。

吾々は死せる組織は此れを葬り去り、新しき組織を求めて出發する。

僕が瓦斯電に入つたのは決して死せる組織に活をいれる爲ではない。新會社に新組織を運用する面白さにあつたのだ。

僕が瓦斯電に入つたのは決して死せる組織に活をいれる爲ではない。新會社に新組織を運用する面白さにあつたのだ。

僕が瓦斯電に入つたのは決して死せる組織に活をいれる爲ではない。新會社に新組織を運用する面白さにあつたのだ。

だが新會社建設の仕事位やり甲斐のあるものは少い。幸にして長瀬兄の蹴球部建設の總てが立派に新會社建設に當り、
とるべき指導原理となり得る。現在僕は非常なる張り切り方である。何故ならば日本に於て、最初の蹴球部精神による會
社を作らうと夢を畫いてゐるからだ。

話 の 泉

或る春の暖い午後の事である。某君「キミ、未だ終らないかね」床屋の亭主「仲々です。偉大ですね。貴君のおつむは。ぐ
つすり寝てもいいですよ」某君「ウン。皆さう云ふよ」亭主「帽子は何時ですか」某君「友達の言によれば、俺の帽子で服が
一着出来るさうだよ」

暖い日が窓を通してうららかに流れる。カナリヤはちつとしたまゝ。亭主は日暮迄に終ればいいと思ふ。某君又うつとり寝
込む……をはり。

先輩からの書翰集

◇そ の 一

前略　浦高戦勝利の報誠に感慨無量です。豫科生諸君、
よくやつてくれた。有難う。二階堂主將を始め豫科三年の
諸君の喜びは如何ばかりでせうか。

いづれ苦心談をゆつくり聞き度いと楽しみにして居ります。御一同御自愛下さい。

六月二十八日午前七時市田商店にて

神野

野

な事ではないか。

九月二十八日早朝

神野光司

◇そ の 三

オメデトウ。アトタノム。トヨタ。

◇そ の 四

オメデトウ。ゴケントウヲシヤス。ナガセ。

◇そ の 五

ヨクヤツタ。ツイデニケイオウモタノム。ミヅシマ
(以上リーグ第一戦早大を破つた時に戴いた諸先輩からの
祝電)

◇そ の 六

早大撃破の快報飛んで歓喜の涙あるのみ。有難う。有難う。よくやつてくれた。此の勝利こそ、幾多の先輩が魂を
こめて幾年か待つた事か。遂に君等の健闘が今日この喜び
を得て呉れた。然し此の大きな喜びに醉ふ前に来るべき戦
を真剣に考へてくれ。去秋吾が小平に敗れて語るを知らな
う。よくやつてくれた。此の勝利こそ、幾多の先輩が魂を
こめて幾年か待つた事か。遂に君等の健闘が今日この喜び
を得て呉れた。然し此の大きな喜びに醉ふ前に来るべき戦
を真剣に考へてくれ。去秋吾が小平に敗れて語るを知らな
う。かつた宿敵慶大を相手の氣持に、調子に捲き込まれる事な
く、常に此れをリードする。これこそ慶大と戦ふに不可缺
大を破りたる勢に於て慶應も屠つて仕舞へ。

必ず勝つんだ。どんな事があつても負けられんぞ。遙に新御健闘。

匂々

九月二十九日夜

二階堂謹司

東京商科大學ア式蹴球部々員諸兄

◇そ の 七

拜啓 宿敵早大を見事に一蹴して素晴らしいスタートを切られた事、實に大慶の至り、その御猛闘振り厚く感謝致します。何卒今後も其の勇猛心もつて優勝を確保せられん事を切望して止みません。

部誌「蹴球」並びに招待券、何時も乍ら、誠に有難う御座居ました。皆様の御元氣な御様子を拜讀して大變なつかしく存じました。

先づは御禮迄

敬具

城島鎮雄

十月一日

◇そ の 八

東京商科大學ア式蹴球部御中

拜啓 益々御清祥之段奉賀候

陳者 今回東都大學リーグ戦第一戦に於て、見事勁敵早

拜啓 益々御清祥之段奉賀候

東京商科大學ア式蹴球部御中

「三タイ二ノウダイニカツ」の電報を受取つた。諸君有難う。本當によくやつて呉れた。「商大集團の力」——此れは去年と少しも變らない。商大蹴球部の下に一致團結した諸君の奮闘振りは衆目の見る所。不撓不屈の精神は前半二對○とリードされながら見事挽回して、三對二の勝利を齎したのだ。勝つた時の諸君の感激は如何ばかり。去年立教に勝つた時の涙と同じ涙が諸君の頬を流れた事と思ふ。

然し諸君は一部へ残つたといふ事だけで、満足してはいけないでせうね。(最悪の場合を考へると未だ一部殘留にも不安があるのだから——此れは遠く離れて居る僕の取越し苦勞かも知れぬが——決して氣を弛めてはならない)一部へ留るだけの事なら既に去年それを爲し遂げてゐるのだ。商大蹴球部は年一年向上して行かねばならない筈だ。今年は少なく共三位以内に喰ひ込んで戴かねばならない。

リーグ劈頭、早大を破つた諸君だ。意氣天を衝くものがあるでせう。その意氣は今度の勝利で彌が上にも燃え上つた事でせう。帝大、文理大も諸君の意氣、團結の如何によつて何とでもなるものと思ふ。

稻田大學を擊破致され候事、誠に慶賀の至りに奉存候。永年母校の爲に一意專心練習に努められし部員諸兄の御喜びはさぞかしと察し入候。思へば四部に陥落の悲境より一部に昇格の一昨年に至る迄數年に亘る異常の精神は小生の如く中途挫折せる者の心より尊敬せる所に御座候。昨年一部に昇格のシーズンにも奮戦よく最初の危機を切抜け、本年は更に進んで留守軍とは云へ早大を破り、商大サッカーの名を世に知らしめたるは將に近來の痛快事にて實に嬉しく存じ居候。生憎當日は小生旅行中にて參戰せず、紙上にて諸兄の奮闘振りを想像せるに止り候へども、いづれ、第二、第三戦には出来るだけ都合して應援に参る心算に御座候。

遠くは故渡邊兄、續いて長瀬兄、以下後藤、二階堂、神野その他の諸兄のたへざる御努力に對し敬意を表し、併せて選手諸兄の益々元氣に、益々奮闘さるゝ事を祈上候。

十月一日

匂々

◇そ の 九

商大蹴球部諸君

拜啓 益々御清祥之段奉賀候

西田嘉兵衛

十一月三日

於西宮 水島茂

◇そ の 十

吉報を期待して居る。

拜啓

十一月三日

於西宮 水島茂

お手紙を有難う御座いました。貴君のお便りを何度も繰返して読み、眼の前に蹴球部の懐しい生活を思ひ浮べました。そして蹴球部時代の嬉しかつた事、辛かつた事が、まさ／＼と思ひ出されたが、今は早、しがない坑内下りの我身を顧みて感慨無量です。皆張切つてやつて居るのがあり／＼と刺りました。兎に角勝たねば嘘です。その點から言つても三年の責任は重大です。然し責任は一面から言つて楽しいものです。

メンバーを見ましたが、大分變りましたね。チームの戦法も構成員たる各人の性格に合致した方向にスムースに暢びて行けば、また一段の進境が見られる筈です。秋の試合が見たいですが、九州の片田舎では不可能です。

今度の月曜から百廿五度もある排氣道の掘進の鑿岩機の

實習です。百度の高熱何ものぞです。諸君もがんばつて下さい。

草々

六月六日

森田昭之

すつかり秋になりました。元氣な貴君達は力強く大地に活躍されて居らるゝ事と思ひます。既に合宿も終り、目標に戰に戰略を鍛つてグランドに商大軍を指揮される貴君の

張切つた姿を喜ばしき思ひ出として毎日必ず其の頃の時間になると部の事を思ひます。朝夕はめつきり涼しく愈々練習もこれから實質的に能率がぐんぐん上る時となりました。

全軍必勝の信念に燃えて高鳴る胸を抑へ着々と準備に御専心下さい。當方去る三日より動員下令され此れが準備の爲め多忙な十一日間を張切つて過しました。

九月十四日

神野清一郎

話の泉

吉澤君興奮するとお國言葉をまる出しにするです。

本科の衆はもはや來たかね
本科の衆はトタンにボンヤリするです。

先輩訪問記

豫三石割知之

北支事變で騒がしくなり始めた時、七月十九日(月)に鈴木主將と神野先輩を訪問すべく濱谷驛で待合した。さて行かうとした時にどの自動車に乗つて何處迄乗るのか薩張り判らないので、僕が單身ボリ公の所へ頭を下げに行つた。

處が薩重聯隊は二つあると云ふので、何處と何處にあるのかを訊ねたら、二つ聞いてどうすると逆襲だ。それもさうだと思つたが面倒臭いと思つて丁度通りかゝつた自動車學校といふのが來たので、「これだらう。たしかに自動車學校へ移られたといふ話を聞いた」なんて嘘げな記憶からひねり出して乗つてしまつた。所が自動車でとても遠い所迄來て了つて、終點に來た時には一寸不安になつた。門衛で面會の事を話すと、未だ演習から歸つて居らぬから、一

時間程して來て呉れとの事。やつと安心した。その人は「商大の方ですね。神野に面會ですか」とニコ／＼笑つて訊ねた。

そこの附近の氷屋で一杯五錢の氷水で一時間粘つた。でもよくあんなあやふやな事からでも面會出来るものだと感心した。

面會所といふのは門衛の裏の藤棚の下に机や椅子が置いてある割合涼しい所であつた。其所で兄の兵隊姿を想像しながら待つ事三十分。

「幹部候補生、神野清一郎、面會に参りました」といふ大きな聲が聞えて、肩に星三つ光らせて?此方へ走つて來られた。日焼した、一寸髪はのびて居ましたが元氣なお顔

に接する事が出来たのである。

「すーと元氣でしたか」

「四月に一週間ばかり寝たよ、やつぱり参ったよ」とは云

はれても昔と相不變の御様子。

一月入營されてからの事を伺つた。それによると原隊（近衛輜重聯隊）へ入營されてから三ヶ月は初年兵として

ビシくやられたさうです。

「二十二の二年兵になぐられるんだから、丁度豫科生にな

ぐられる様なんだからね」

それから四月になると幹部候補生の試験を受けられたのです。受験者四十六人でその中十八人バスして、神野さんは一番で合格されたのださうです。小生等は一番といふのは脊の低い事に於ては知つて居ますが、その外には如何なる事にも覚えがありません。

鈴木キヤブテンも「一番とは凄え」と感嘆久しうした。

受験者の中には商大卒業生は二人で、その他に帝大、早大その他の大學卒業生が居るのださうです。自動車學校に來られたのもそれからで、しかも入つてからは今迄連續一番

「自動車の方は未だ樂でせうね。歩くのと較べれば」と
訊ねれば
「まあ樂は樂だらうけれど、でも平坦な道は走らせて呉れないからね。満洲の曠野を行くとばかりに、わざく凹凸のはげしい所を運轉させるからね。とても疲れるぜ。それに後の掃除が大變だよ」

自動車も乗るばかりでなく、向ふへ着いてから弾薬運搬の教練をやり、その弾薬といふのが、眞物の弾薬箱と同じ重さのコンクリートが詰つて居るものださうです。

部の話に移ると色々細い事迄も訊ねられた。新入部員三人だとか、バックボールドを建てたとか、近況を報告した。

「今年の秋は今迄の様に危い試合は避けたいね。何しろアワードに餘り人が居ないらしいね。でも豫科はリーグ優勝だそうだね。お目出度う」

此所で熊澤兄の去られて、小生がピンチヒッターとして乗り込んだ事を報告する。そこでお暇だつたら何か書いて

を取つて居られるさうです。

六月十日に第二期の試験があつて、甲種、乙種に分れて甲といふのは將來士官に、乙は下士官になるのださうです。勿論神野さんは甲です。

「軍隊といふ所ははつきりして居るからね。試験があると一々あとで読み上げるからね。『此れが大學卒業の某々の答案だ』とやられるんだから参るよ」

入營した時には色々と仕事が多く、新聞一つ讀まれた事が無いさうです。今居られる所は新聞位は讀むべしといふ程なので、部屋に一つ位来るさうです。

「今度の事件で出る様な事は絶體にありませんか」「まあ幹部候補生は出る事は先づないだらう。でも原隊の方じや出たさうだからね」

今頃の日課として朝五時起床で、體操、銃剣の練習があるさうです。

「原隊に居た頃は朝、顔一つ洗へないんだからね、入る時買つたチューブ此の間無くなつたよ。六ヶ月に一つのチューブが持てば、相當持ちがいゝです。

戴く積りだつたが此の事變で忙しいさうで、

「それに書く事は皆の思つてゐ通りの事なんだ。でも雑誌は卒業すると、とても有難いね、皆の氣分がはつきり判るからね。部の空氣といふものがすぐピンと来るね。」

小生の責任愈々重大なるを感じた。

「今年のチームは中盤は割合巧いんですが、ゴール前はとても弱いですね。豫科はそれと反対に押されながらも逆襲で點を極めますからね。本科も時々やられますよ」

「皆が一部に居ると個人プレーを巧くやらなければならぬといふ事を痛切に感じ過ぎてるんじやないかい」

一時間程お話を伺つたが五時半頃に其處を離去了した。

「じや元氣で、皆に宜しく云つて呉れ給へ」と舉手の禮を

され、走つて行かれた。

「幹部候補生、神野清一郎、面會恙く終りました」と大きな聲が聞えて來た。兄の元氣に走つて行かれる姿を見送りつゝ門衛に一禮して外へ。傾いた西日を背に一ぱい受けたバスの停留場へ急いだ。

附記　會見談は皆鈴木主將との談話で筆者は單なる傍聴者です。

送別文集

五兄を送るの辭

本三 鈴木 彰

又來るかな四月。苦闘の連續に終始六年間の努力を惜しまなかつた五兄をこゝに送り出すに當り誠に感慨無量のものがある。

商大蹴球部のどん底時代より現在の輝かしき蹴球部を建設された人々に三つの時代があつた。即ち長瀬大先輩時代、二階堂、後藤兩兄時代及び神野、水島時代である。而して之は諸兄の努力の基礎となり常にその活躍を助けて縁の下の力石的 existenceとなつてゐた者は淺枝を始め荒井、角田、森田、田島の五兄に他ならないのである。

五兄の蹴球部生活の歴史は到底涙なくては計り得ぬ。誠に波瀾を極め苦闘そのものゝ貢であつた。三部より四部へ、而してその後の躍進又躍進の吾が蹴球部の蔭に隠れた力、自己の生活を犠牲にして全く蹴球部に捧げ盡した五兄の奮闘を吾

々は心から感謝せねばならない。眞の蹴球部を建設する者はスター・プレヤーでは断じてない。眞に蹴球部を考へ蹴球部を愛する人々によつてのみ固い蹴球部が生れるのである。この意味に於て五兄の六年間の努力、奮闘の前には吾々部員一同心から頭を下げねばならない。

吾が商大蹴球部も一部に活躍することゝに漸く三年、いよいよその真價を發揮する時期が到來した。この時に於て苦難時代よりの尊き五人の経験者を社會に送り出す事は誠に寂寥たる感がある。而して時の経過の前には如何ともし難い。

吾等蹴球部員一同此處に男らしく五兄の志を繼ぎ本年度の活躍を誓はうではないか。之が何よりも五兄への最善の餞であると確信する。

終りに當つて五兄の社會への門出を心から祝福すると同時に、その尊き経験を基礎として健康に留意され、實社會に於ける一段の飛躍を祈つて送別の辭と致します。

行け、五人の若き戦士。

淺枝彥太郎。荒井文雄。森田昭之。角田昇。田島輝重。

昭和十二年度主將

鈴木

彰

枝村兄を送る

枝村藤三郎兄こそ吾が商大蹴球部の躍進途上に力強い足跡を残された人である。旺盛なるファイティングスピリットは勿論、特にテクニツクの上に於て大なる刺戟を若き部員に與へてくれた方である。不幸にして病を得、最後の學年にはボーグより遠ざかつて居られたが、常に背後より力強い應援を以て吾々部員を心から勵ましてくださつた。どうぞ今後健康に注意され、洋々たる社會に於て雄飛されることを祈つて止みません。

送別に當り、部員一同に代り厚く御禮申上げます。

昭和十二年度主將

鈴木

彰

送別の辭

荒井兄へ

大掛隆久

淺枝兄へ

此の春の合宿練習でしみるゝと感じた淋しさ。それはグランドも狭しとボールを追ふ兄の元氣な姿が見えぬ事でした。昨秋、未だ癒えぬ足の負傷も省みず、主將としての重責を双肩に負はれて奮闘せられた兄の姿が何れ程吾々の勇猛心を奮ひ起した事であらう。兄は言葉少い中にも心の底にしみ入る様な親しさを有つて居られました。

對早大戦を目前に控へ、明治神宮の神前で兄を圍んで必勝を誓つた感激は兄の心にも微笑ましく蘇つて来る事と存じます。

戦績は兎も有れ、苦難を乗り越え、尊い努力を積まれた喜びは、重責を果して學窓を去られる兄には一入深い事と推察致します。

此度に遠く京城へ去られ、簡単には御目に掛けぬのが残念ですが、秋には良い御便りが出来る様頑張る積りです。

森田兄へ

健康を害されて第一線に立ち得ぬいら立しさを壓へサブの尊さを身を以つて示された教へこそ、商大蹴球部員たる者の一時たりとも忘れ得ぬ教訓であり、感謝して餘りある事である。

角田兄へ

蔭に日向に蹴球部の爲に盡された兄の力は燃し銀の奥深い輝きを想はせます。

井さんが去られるのは商大蹴球部の大きな痛手です。蹴球は單なる足技でない事を試合毎に良く吾々に教へられました。兄が去られてから、兄の好敵手村井が手持無沙汰の様子で、春の合宿でも相手が無いまま一人で餓りまくつて、流石に顎がへばつたと嘆いて居ました。

幸ひ兄は東京に居られるので、何時でも御會ひ出來るのが何より嬉しい事です。

された中に、兄の面目躍如たるもの有らうと思ひます。

兄の強氣は自他共に許す處、九州の鑛山で活躍して居られる様子が眼に見える様です。グランドで示されたファイトを以つて洋々たる大洋を乗り切つて行かれん事を祈ります。

田島兄へ

難に打勝つだけの氣概は兄等によつて吾々の心の中に充分培はれて居る筈です。年一年と築き上げられて來た基礎の上に、ゆるぎ無き殿堂を建設して行く事こそ兄等の御努力に報ゆる只一の道であると共に、残つた全部員の尊い使命であると信じます。

秋の奮闘を誓ひ以つて送別の辭と致します。

一二・四・二七

襄ひ来る數々の困難に打勝たれて蹴球部生活を全うせられた事に對し、深く敬意を表すると共に、此の部誌を生み出された兄の御努力を無にせぬ様に、共に部誌を愛して行き度いと存じます。

◇

球人迷々傳

本三 村 井 恒 典

蹴球部建設當初より部の主力として活躍して來られた兄等を失ふ事は、我が部の一部に於ける基礎未だ固からざるに思ひを致す時、痛手の大なるを嘆ぜざるを得ません。

四部より一部への三年間は吾々に優勝の喜びを教へました。それからの二年間強豪を相手に一部としての地盤を築き上げて行く事は決して樂な事ではありませんでした。苦しいからと云つて挫ける様な吾々ではありません。苦

荒井といふと思ひ出すものがある。荒井を入れて四人食堂にぼんやりして居ると先ずニヤリと笑ふのが彼である。「エイ」と云ふ。意味深な「エイ」だ。鈴木が「嫌だなあ」と言ひながら歩き出す。「はつきり言つちやえ」と言ふのは誰だか知らない。四人で揃つて歩き出す。途中で會ふ人には「一寸圖書館まで」てな事を言ふ。聞く方はニヤリと笑ふ。これだけで充分だ。誰かが飯を喰ひ、二人は飄

爽と、二人はショーンボリと多摩湖線に乗るのである。金のある時はジャン拳でパンを喰べる。大抵何とかかんとか言つて金を拂ふのは荒井で尻尾を噛つて居るのは鈴木である。それから部屋へ行つて黒板に字を澤山書く。新聞を見たり耳打ちしたりして書いて居る。話がレビューになると真先に乗出すのが鈴木、次は荒井。彼は張切つて話し、足を揚げて照れる。

黴菌の養成所的の特有の芳香を發する布を身體に結びつけてグランドへ出ると全身心臓見たいになつて馳廻る。此の時は口を緘んで下を向いて蹴つて走つて居る。

歸途暗くなつた砂利路で喰ひてえと言つて左に切れるのは彼、實によく喰ふ。松山迄の養分を押込む。ニクマンなんか幾つあつても足りそうもない。土管見たいなズボンを穿いて大抵の時は煙突みたいな側に歩いて居る。日劇へ行つたら一寸寄るぜ。ほい來たとすぐ飛び出すだらう。カモそこで居て仲々ガツチリして居る。アライさん。之で一杯。何それ程でもない。

富浦で「彼奴は一番持てたぜ」とガケは云ふ。「富浦で

ガケは持てたぜ」と角田は云ふ。どつちだか判らない。だが其の他多勢の連中がエキストラで居た事は確からしい。五人で捕つて卒業記念寫眞を寫した時、正面へ行つて此の中で誰が一番シャンだらうと言つたら彼氏ニヤリとした。角田が笑つたぞと言つたら後で怒られた。何でも僕の後に角田の友達が居たのでその人に笑ひかけたのだそうな。

淺枝が血だらけになつて歸つて來た。オートバイと正面に打突かつた。そこで早速「淺枝主將オートバイと打突かり片足折られた」といふデマが飛び、合宿中が湧き立つた。彼の室に行くと全身真赤だ。まさか足は折れなかつた。赤いのは半分薬だつた。それでもオートバイと打突かつて擦り傷ですんだなんて嘘見たいだ。彼に言はせると「打突かる時に日頃鈴木のタツクルを避ける如く身を浮いて居た膚毛だらけの足を思ひ出す。神宮へは五回行った。最初は涙を流してきつと勝たうぜと云つた。これは勝つた。後は殘念ながら一度しか勝たぬ。あの砂利道を十數人彼を中心歩いて居た。誰も口をきかず砂利だけさく

さくと鳴つて居た。折からの暴風雨に參詣者も稀だ。バツグ小脇に静肅に歩いて居た。何時もおしゃべりの者も、彼の如くむつゝりと。

此れで三人、後は南アルプスで木株を熊と間違へて半時間睨めつこをした森田と、世田ヶ谷の聖人と言はれて腐つた田島とが残つて居る。一度に皆書いては他の人達の書く事がなくなると苦情が來さうだ。

かれは兎に角として、此の何か寂しい、頼りない氣持は唯單に別離の悲哀といふ言葉で言ひ棄てゝ良いものだらうか。何かその甘酸っぱい感情の中に冷靜に検討して見なければならない物がある様に思へる。苦闘時代といふのは此の兄貴連中のみに獨占される言葉なのだらうか。

苦しみ闘ふ時代、生活こそ蹴球生活であり、吾々の人生なのではあるまいか。先輩兄貴連中の話を遠い昔の武勇傳と聞いてはならない。面白い時代もあつたものだ等と昔を追つてはならない。愚弟賢兄となるか、賢弟賢兄となるか。吾々の時代は刻々と過ぎ去つてゐる。賢弟たるの道如何。刺り切つてゐる。

眞剣な生活、苦の生活を生き抜くだけだ。

送別の辭

本二 小 西 正 夫

淺枝主將、他四人の新しい先輩を送るに際し、其の前途を祝福しつゝ、自分の部に對する氣持の一端を述べ、それが報恩の一ともなれば幸である。

愈々「蹴球部苦闘時代」最後の人々を送る事とはなつた。何時でもそうかも知れないが、今年は特に送るといふ感が深い。或は豫科で一番の兄貴だつた故かも知れぬ。そ

電車餘話

本一 二階堂 晴三

本も讀まないで、電車の中に乘つてゐれば居眠りしない限り何かを見てゐる。電車にも既に三年間を乗つたこのご

る、六年間電車で通つた五兄の前に、何か電車に關聯した事を書き一筆送別の文を綴るも一興と思ひ、駄言を連ねて禿筆を弄ぶ。

さて——電車の中を見渡せば、何かの所用を持つた人、所謂鐵道省のお客さんである。手近にその國の世間を見やうとすれば、電車の利用が賢明と氣附かす程の光景であり眺めである。然し折々見出す非お客様、その例外は鐵道省にとつてその従業員である。高貴の地位にある人の例外は見分けがつかぬ。これ等各々與へられた職場に赴くものが乗るものはどの電車に乗つてもよく出會ふのは、我々日常経験する所である。

或朝山手線の某驛を出た電車の中に、一人の省線従業員が乗り込んだ。この電車はこの驛ですつかり空いて坐る席の餘裕は綽綽とある。にも拘らず坐らうともしない。我々が練習の疲労を乗せて歸途に就くとき誰しも座席を占めたいの衝動に駆られるは未だしも、この坐り込むために往々見せつけられる世相の縮圖は、極めて不快そのものである。この新しく入つて來た驛員に似た彼は、坐らうともせられたのであらう。

れ、英雄なれ、乞食なれ、飢ゑたる時のパンの味には變りはない。されば、こゝに示した人間の型に於ても吾人の行き方に或る暗示を與へて呉れるのは否まれない。
五兄は蹴球部に於て如何なる蹴球部生活の型を示されたであらうか。自分はその五つのものが假令相異なるものにせよ、一つの緒から導き出される最後のものは同一であつたらう事は信じて疑はない。そこでこそ、この一年も送られたのであらう。

故に於て、自分は「空いてゐても坐らうともしない人」の型は極めて蹴球部には必要なものであると斷言する。即

す、昨夜の泊番にでも疲れた青白い顔を懸命にその手に持つ本に蔽ひ込んでゐた。新宿が來て立川行の省線に乗れば、世の中は、同じものを常に見せては呉れないものである。空いてゐる電車の中には、運轉手らしい黒靴を持つた人々、前に反して腰を下して乗つてゐる。無論この人達の中には、新しく乗つて來るお客様に立つて席を譲る人が居る。けれどもさうでない人達をよく見受けた。尤もなことであらう。

これが事實の報告である。恐らく彼等は鐵道省の一吏として無賃乗車と云ふハンディキャップに於て、その權利行使には、常にお客様の總てに於ける優先權を認めなければならぬ事は餘儀なくされてゐるものであらう。それは常識に依つて極めて容易に判断される事である。然しこゝに述べた彼等の中にも明らかに異つた人間の型がある。敢て坐らうともしないもの、空いてゐれば坐るもの、然らざるもの等々。

總べて世の中は向ふ三軒兩隣の集積であるからには、何處に行かんと何をしようとするものではあるまい。學者な

ちその一貫した主義が貴い。外の事はさて置き蹴球部には一貫した主義がある筈だ。傳統精神と云ふものが一つの概念に於ても、存在してゐる筈である。その人の部生活の一斷片が常に蹴球部精神に則つて動いてゐたら蹴球部は何時まで經たうと更るものではあるまい。

凡そ送別文の型式を外れた一文に、自分の考へを甚しく曖昧な引例に述べたが、この一文に依り、何らか五兄の送別の微志が掬せられゝば幸甚の至りである。

霜おいたひろのゝ上の獨り松

阪神パーク中で清水君が熱心に見物して居りました。暫くすると彼の顔がうれしさうに輝きました。遂に彼がマントヒビに似て居る事が皆に分りました。マントヒビは幸福さうでした。

話 の 泉



—隨筆・感想集—

雜感

大掛隆久

一部に於ける過去二年の體験は我々に何を教へたか？ 最後に物を云ふのは矢張り團結の力であると共に、一部優勝を目指す以上、個人の力量を更にノヽに延さねばならぬ事である。小ちんまりと纏つたチーム、鋭味の足りないチーム、それが吾々に與へられた世評である。立派な精神と強い意思力は備へて居るが、體の弱々しい人間を見るかの如き感を彼等に與へるに違ひない。最後に成功をかち得る者は強い體力の所有者であると云ふ。例へば蹴球部を有機體と考へるならば適切にあてはまると思ふ。

蹴球部を一層力強い統一體とする爲にはそれを構成する

各部員自らの力量を向上させて行かねばならぬ。

「個人プレイ」と云ふ言葉の中には、商大蹴球部に育つた吾々にとつて何かしら、不快な響が含まれて居る様に感ずる。それは個人技を持たぬ者のひがみと云つてしまへばそれ迄だが、足技に囚はれて精神を忘れる事に對する恐れが暗々裡に感ぜしめる一種の自衛の念かも知れない。

然し考へて見れば個人プレイは單なる足技ばかりを指すものではない。へばつても「何糞」と頑張る意思力、のされても「此の野郎」と奮起する精神力、自分を忘れて互に助け合つて行かうとする氣持、結局チームプレーの根柢をなす凡ゆる個人の心と動作が含まれてゐる筈だ。チームプレーあつての個人プレーであり、個人プレーあつて始めて圓滑なるチームプレーが實現せられる。その間には何等の矛盾も無い。

奮ひ起される事か。十一人の力で試合をするのではない。君等の尊い努力が一人の上に乘移つて相手にぶつかつて行くのだ。明日の蹴球部は君等の双肩にかかる事を思ひ、遠大な理想の下に一層頑張つて欲しい。

見平凡に見えるショートキックにも、ランニングパスにも汲んで盡きせぬ味が含まれてゐる。それを生かして身につけると否とは各プレイヤーの心懸け一つによる。

常に己の短所を見つめ之を補つて行かうと努力する事は容易な事ではない。「斯うしたら良いだらう」と云ふ事は誰でも知つてゐるがそれを断へず實踐し得る人は少い。

「俺は斯う云ふ信念を有つて居る」と語り得可きものでも無く、又聞く可きものでも無い。常に蹴球部を思ひ、己を省みる時、心の底に鬱勃と湧き出る何物か有る事を思ふ。これこそ凡ゆる蹴球部の生活の根柢をなすものと私は固く信じて居る。

×

良きサブを持つ事こそ商大蹴球部の大きな誇りである。

サブの諸君、君等が黙々と練習に勤む姿を見る時如何に

{ }

雑感

感想

本三 孤舟生

本二 後藤虎雄

北支の事態之急、各自が各々その分を完全を盡す事が報國の誠である。

×

淺枝兄等五君を送る。別離の感一入深し。兄等は常に部の第一戦の闘將として凡ゆる試合に捨身的奮闘の模範を示した。我等今秋を期して兄等に最大の贈物を爲さん決意を有す。

×

長瀬先輩曰く。「盆栽的人物になる勿れ」はき違へた統制と指導者の方針態度こそ、心すべき事である。常に尊敬する先輩の御教訓を味ひ、以て各々自省すべきである。

×

俗務に追はる吾人、生來の非才に加へて熟慮の暇なし。徒らに完言を並列して誌上に汚點を印するを惧る。

然し現在の吾々にとつては、其の事實は、理想郷のそれとしか感じられない。遠いものとしか感じられない。それ

長瀬先輩は一蹴球部は意氣と熱のるつぼであり、而して又愛に充ちた境地である」と言つて居られる。同じ意味の事を二階堂先輩は武士道的訓練に於ける「何くそ!」の意氣と常に「自己を顧みる」の精神を以て表現して居られる。

自分が今切實に感じて居るのは此の「自己を顧みる」と言ふ事と「愛の境地」と言ふ事とである。部員同志が大きな愛に依つて包まれて居ると言ふ事實、相互に正しい理解を有して深く結び付けられてゐると云ふ事實を想像すると自分は生きて居ると言ふ喜びを強く感する。それこそ商大蹴球部員としての誇を身體一杯に感する事が出来るのである。

は未だ吾々の努力が足りないからである。自覺して、一步踏み出す勇氣と努力が足りないのである。

其處まで到達するには、自分をもつとしつかり見詰めながら、強い一つの氣持を持つて、相互に接しつゝ進むのではなければならないと思ふ。

一人一人が「自己を顧みる」と云ふ眞剣な而も謙虚な氣持を抱いて、そこから發した理解、そこから湧いて來た愛こそが本當の愛の境地を形作るものと思ふのである。

それは吾々は現在の生活よりも一步でも進まうと云ふ努力を不斷に續ける意氣に燃えて居なければならない。自分を振返つて見るのを避ける卑怯さを、或は自覺して居り乍ら、努力しない消極性をも斷然清算しなければならない。そこに若い吾々の生甲斐があり、同時にお互を理解し、愛し合ひ、共通の目的に向つて奮進すると言ふ歡喜を味ひ得るものである。

繰返して言ふ。「自己を顧みる」ことに依つて結ばれた吾々の愛は、如何なる事に對しても微動さへしない力となるであらう事を。

グランドに於ける凡ての行動が自分を見つめて振返つて、現はれたものであり度いのである。そこまで各自が努力する事に吾々の意義があり、そこ迄進まうと云ふ眞剣さに依つて結ばれた部員の愛は最も深く強いものとなる。即ち、

各自が常に「自己を顧みる」事に依つてこそ、部員は深く強く結ばれそこに「蹴球部の愛の境地」が現出する。

宮本武藏

本一 米山大三

先日まで朝日の夕刊に、吉川英治の「宮本武藏」が載つて居た。僕はこれを一度も缺さず讀んだが、實に面白い小説であつた。僕には勿論その文學的な價値とか、歴史上の

事實等に關しては判らないが、兎角僕は此の小説に全く引きつけられてしまつた。或る時は涙せんばかりに感激し、或時は夜のふけるのも忘れて思索に耽り、又或時は全身に鬪志の漲るのを感じた。此の小説の何が僕をして此の様にせしめたかと云ふと、僕は常に武藏の剣と僕等の蹴球との間に、或る一致したものを感じて居たからである。僕は今此の武藏と云ふ人間を書いて見たいと思ふ。

宮本武藏は剣の修業者である。彼は年少十七歳にして雄志止み難く闘ヶ原に出陣してより、我に死を與へ給ふか我に天下一の剣を與へ給へ、と神に祈りつゝ必死に剣の道を求めた。彼が食事をする時も、道を歩み人と語る時も。又書を読む時も彼は常に剣の修業者である。何時如何なる時も彼は剣の修業者であつた。眞剣であつた。彼の日常の總ての事物に對する心は剣の道の精神であつた。武藏には樂しい家庭も優しい兩親もない。暖い夕食すら稀である。彼は常に粗末な晒木綿を着、質素な物を食つて、唯々腰の大刀と共に剣の道に精進して居るのである。彼の愛する一人の戀人の彼に付き慕ふのも、振り離して剣の道へと進んで

青白きインテリである。彼には何等の理想も無く従つて何等の信念もなく、世の荒波にもまれて感情と本能とに身を委ね右に左によろめきつゝ生きて行く男である。彼はあらゆる誘惑と苦業に敗れて行く。彼にのこされたものは不平と後悔とそして墮落して行くことだけである。

剣の道でも蹴球でも學問でも音楽でも、何か一つの事に一身を投げ入れて、深く掘り下げて行つたなら、必ず精神的な最高の點、人格の完成に到達出来ると僕は確信する。武藏の理想は信念は、即ち僕の理想であり信念である。宮本を米山とし、剣を蹴球と書き換へて一向差支へ無いやうな人間に成り度いと常に思つて居る。がしかしともすれば、又八の方に成り勝である。

現代スポーツ考

本一菅瀬十朗

抑々スポーツは古きギリシャに於て行はれた神祭に奉納

行つた。彼は文字通り剣の道を求めて休息する事を知らなかつた。あらゆる苦業も誘惑も剣の道の完成への逞しい意志の前には、姿を消してしまつた。

彼は初めは唯々天下一の剣を得んとして必死になつて努力したが、彼の技が天下一に一步二歩近づくにつれ彼は變つて來た。技よりもより崇高なる精神的なものに近づいて行つた。又彼はこの様に剣の道に全生命を投げ入れることに依り、必ずやある最高な點に到達出来ると云ふ確信を心底にいだいて來た。その最高の點とは、人格の完成か、全智全能の神か、極樂淨土か、理想境か、はつきりは解らない。が、しかし彼は明かに理想をいだき、それに到達しつゝあつた。彼は此の理想の下に、剣の道に精進し始めたのである。彼は刀研ぎの名家光悦と知り精神を磨き、又遊女吉野から道を學んだ。此の二人とも各々その道に精進し大成した大家である。彼は吉野の云ふ道を悟り光悦の藝の精神を理解する事が出來た。彼等三人はやる事は違つて居たが、何か一致した所に到達しつゝあつた。

武藏の親友に又八と云ふ男が居る。此の男は現代の所謂

の意味として行はれたものを、その起源とするのであります。當時行はれたスポーツは純然たる競技で、人々はそのお祭に集つて、その技を競ひ、覇を争つたものであります。それが次第に發達して今日に及んでゐるのであるがその發達の過程に於てはスポーツなるものについて種々問題があると思ふ。

今日行はれてゐる彼の世界スポーツの殿堂たるオリンピック大會の如きその名は當時の名残りである。

元來オリンピック大會なるものは世界各国の體育向上を知る尺度にして各國はその記録によりてその國の體育向上の程度を決定するものである。この意味に於てオリンピック大會は一つの競技であり、それを通じて我々は體育に就て一つの實驗的統計的事實を知る。こゝに現代スポーツを見る時、現代スポーツは古代ギリシャの流れを汲んでゐるとはいへ、スポーツの意義又スポーツマンの使命なるものを考へる時、スポーツは決して我等の究極の目的ではあり得ないといふ事は誰しも容易に首肯し得る事と思ふ。前述のオリンピックの如く單なる體育向上の尺度であるとする

ならば、我々はそこに一定の限界を見出さなくてはならない。一つの數學的見地よりしてそこに適切妥當な一點が生じなくてはならないのである。然し數理的抽象的の理論はさて置いてその向上的程度は決して無限ではあり得ないに拘らず、世人は往々にしてその本義を省みず、徒に未葉にのみ走り、技なり記録なりにのみ没頭し、單なる道としてのスポーツ偏重に傾いてゐるかの如き觀があり、これを一つの屁理窟といふも少くとも斯くの如き事實非難の根據あるをみとめざるを得ない。

今日のオリンピックを見るならば或る意味に於てはこれは人間のなし得る技の極致を見出す事にのみ孜々としてゐる。そしてそこに人種的優越感を認めてゐる。

然しスポーツを人間の有する又人間の發揮し得る種々の方面への能力測定の技であるとするならばそれは又當然の歸結である。

然しながら私はこゝにスポーツとは即ち自己の生存の意義を高めんための一つの精神的、肉體的修養であると云ひたい。

サブの氣持

本一狩森正雄

「言ふは易く、行ふは難し」とかや。自分の言ふ事と自分の行とは矛盾して居るやうに見えるかもしれない。然しそれはこういう信念のもとに蹴球をやつてゐるのである。自分はこういう信念の爲に蹴球部に對する信念が今やつと定まつた様に思はれる。蹴球部の爲には、自分を犠牲にして必ずやつてゆける覺悟が出来た。こんな事は豫科の諸君でも言へるかも知れぬ。然し實際に心からさういう信念を持つてゐると言ひ得る人があるだらうか。これは自分の獨斷かも知れぬが、さう思つて居る。

恥かしながら自分もつい最近迄は本當に蹴球部のために犠牲になれる、蹴球部のためなら死んでもいゝとは心の底からは思へなかつた。蹴球部のためなら喜んで縁の下の力持ちになる、土臺石になる、と口には言つても、實際さうならうとするには悩んだものだつた。實際サブはつらい。

この考へから現代スポーツを見るならば、我らはそこに一つの大きな矛盾を見出すに至るであらう。然し生存の意義と雖もスポーツそのものに自己の生命を見出すとすれば別問題である。修養としての意味に於けるスポーツに終始するとしても宗教にいふ所の煩惱解脱の肉體的修練の如くそこに一定の限度を見出さなくてはならない。

更に享樂の意味よりいへば、之を一時的でなく永久的に見るならばそこに又當然改良し一考する餘地がなくてはならないと思ふ。

即ち歸する所はスポーツなるものは我々人生の目的に達するまでの手段である。而して自己自身のためのスポーツであり、他人の爲否スポーツのためのスポーツではないのである。それは恰も金錢が生活のための手段にして、之を求めることが人生の目的にはあらずして、これを求めるこによつて自己を全ふし得ると同様である。

特に將來も試合には出られない人なんかの氣持を思ふ時實際涙が出てくる。俺は六年間蹴球生活をする。然し試合には出られない。實際俺はどうしたらいいんだ。何の爲に蹴球をやつてるんだなどと悩む事だらう。然し世の中には一生下積みで暮す人も居るんだ。將來の飛躍の前の一踏臺になつて行かうと努力する所に、その人の人格も磨かれサブでなければ得られない、立派な體験が得られるのである。自分は中學時代、近縣八校の試合ではあつたが、全校生應援のもとに優勝し、應援團に取り囲まれて聲をあげて嬉し涙に咽んだあの感激を忘れないだけに、昨年の高商大會決勝にも本當の事をいへば出たかつた。嬉し泣きに泣いたけれども、試合を自分でやつて苦勞して勝つた感激とはたしかに違つた何かものたらぬものがあつた。今考へればサブとしての苦勞が足りなかつたからだといふ事をはつきり認める。今年の春の對帝大戰も自分の恐らくは本科軍のメンバーとしてやる最後の試合だと思つて、捨身になつて戦ふつもりだつたが、それもならず。自分の技のまづいのを

欄にあげて、恥かしながら泣く程くやしかつた。それまで自分といふものをよく考へないで試合に出ようなんて考へて居たから、こんな淺薄な氣持になつたのだと今思ふと穴あらば入りたい氣持である。今自分の蹴球部に對する確固たる信念が出来たればこそ、こういう淺薄な氣持を諸君の前に懺悔して御詫びするのである。今の自分には蹴球をやる、蹴球部のために盡すといふ事に眞の意義を見出し、確固たる信念を持ち得るやうになつた。これは一重に長瀬さん二階堂さんの御蔭と深く感謝致して居ります。本當に自分は心から喜んで縁の下の力持ちとなり得る事を斷言致します。

選手十一人が試合をやつてるんではない。部員全體がやつてるんだ。選手だけが勝つたのではない。部員全體が勝つたのだ。サブの力が大きかつたのだ。サブの踏臺がしつかりして居たのだ。選手だけが負けたのではない。部員全體が負けたのだ。サブが悪いのだ。サブの努力が足りなかつたのだ。そんな事は解りきつてると言ふ人もあるだらう。然しサブとして實際自分がやつて勝つたんだ。自分がやつつてゆく氣分を忘れがちだ。

四部まで落ちた時の蹴球部、四部からぐんぐんと昇つて來た蹴球部、あの時代の氣力、精神力を絶対に忘れてはならない。長瀬さんの言を借りて云へば「ランニングバスの時に自分がバスを出して、相手がそれを取れなかつた時に、自分がもつと好いバスを出せば相手は取れたのに自分が悪かつたと思ひ、バスを逃した方も自分がも少し走れば取れたの自分が悪かつたと。お互にこんな氣持で蹴球をやつてゆくべきだ」と言つて居られたが、これは實に我々の學ぶべき言葉だと思ひます。

「唐様で賣家と書く三代目」といふ句があるが、何でも三代目が特に大切だ。商大蹴球部も一部に於ける三年目だ。今こそ大いに自覺し張切つて行かねばならぬ時だ。この夏の合宿こそはサブもレギュラーも心を一にして大いに張切つて行かう。自分は再び斷言する。「サブとして喜んで縁の下の力持ちとなつてゆくと。」

考へよ、心せよ、大きな目で眺めて見よ。サブの諸君よ。終りに部誌三號の淺枝さんの巻頭言を借りて筆を擱く。

て負けたんだと、心から感激して泣ける奴が現在の蹴球部に何人居るんだ。全部のサブがさうなつてこそ商大蹴球部は大磐石だ。

サブの力がどの位大切か、勝つも負けるもサブの力によるといつても敢て過言ではあるまい。サブ全體が本當に心から蹴球部のためを思ひ、選手の心を思つて張切つて行けば、選手にもその氣持が反映して必ずや試合には立派な結果が得られるだらう。精神がしつかりして部員全部が一致團結してベストを盡して試合をやつたのなら、たとへ敗れても悔はないであらう。

勝つ事が總ての目的ではない。勿論勝つても負けてよいと言ふのではない。必ず勝つといふ意氣と熱で戰つて行くべきだ。然しそれで負けたのなら満足ではないか。商大も一部であるからには技は大いに必要だ。勿論技は大いに磨く可きだ。しかしその技たるや堅忍不拔の精神、何戦の精神の上にきづかれねばならぬ。精神力が第一で技は第二だ。ともすれば現在の蹴球部は技が第一になり、精神力を忘がちだ。部員同志がお互に心から結びあつて敵にあた

「今秋リーグの日割も既に決定した。一身を賭すべき十

月も、目睫の内に迫つた事を痛感する。四月以來の部員の真剣なる練習の結果が數旬の後には展開されてゆくのだ。

最後の合宿を如何に活かすか。一人くの精神が大切だ。勝つ！ 勝つ！ この語の中にこもる最大要素は、精神的要素でなければならぬ。技術の練磨といふも、それは戦に臨む氣持を人々が把握してゐてのことだ。レギュラーもサブも残らず、各々が戦の氣持を作つて欲しい」最後の言葉をレギュラーもサブももう一度よく考へて見ようではないか。

慈悲心

豫三 吉澤 貞雄

四月二十七日の東朝の「鐵筆」なる欄に、慈悲心と題して次の如き短文が載つて居た。

一日曜の郊外の遊園地に行つて私は池の鯉を見て居た。

晴れ渡つたいゝ天氣で園内は大變賑ひ、池の柵にもたれて

鯉に餌をやつて居る人も澤山居た。七八寸位の若鯉が見る間に押し寄せて來て躍り上つて居た。私の隣で二人の角帽の學生がそれを見て居たが、一人がふと自分の喫つて居た煙草の端を摘んで鯉に投げてやつた。『やあ、御臨終だね』と相手の學生が言つた。二人は何遍も此の事を繰返した。

鯉は煙草の切れ端を飲み込んで死ぬかどうかは私には判らない。然し死ぬ處があるといふ事は私にも感ぜられるし

その學生は確かに感じてゐた事である。しかも敢て生物を殺す行爲を爲すといふ事は何を意味するか。此れは彼等に慈悲心の缺けて居る事を示すものではないか。彼等が鯉に對して憐みを感じないといふ事は、彼等が世に出て少く共

大衆の指導者になる時、或は労働者に、或は婦女子に示すであらう態度に何等の關聯性が無いとは言はれまい。私はしなくも此所に現代インテリの道義的不感症の萌芽を見出したのである。』

此の文は第三面の僅かな紙面をさいて出して居たに過ぎないが、現代人、殊に支配階級や、その卵である學生等に

かし愛の無い世界は沙漠である。

さて個人主義に固つて居た人が、自分の屬する一團體に對する愛に目覺めたとする。その團體を愛する事は知つても、往々にして、その團體を個々の單位とする。もつと大きな團體主義に氣付かない場合が多い。我々が人類愛に目覺めたとする。然し本當の人類愛に覺めたなら、當然我々は動植物愛に目覺めなければならない筈である。

我々部員が蹴球部に對する態度は愛部心を基礎とする事は言ふ迄もない。自我を滅し切つて部の犠牲になる氣持こそ貴いのだ。然し同時に此の愛部心は、それ自身が蹴球部にのみ止り得べき性質のものではない。その愛は豫科、一橋、國家、人類……とあらゆる範圍を越へて發展しなければならない。そうして此れこそ蹴球部員各自が持たなければならぬ理想だと思ふ。死ぬといふ懸念が有り乍ら、尙平氣で鯉に煙草を投げる様な氣持は唾棄す可きである。我々は何よりも先に暖い氣持を持たなければならぬ。

對する意義ある警告であらうと思ふ。

凡そ、ぼやくしてゐると蹴落されるといふ現代の社會から感ぜられる不安は、人をして各々其の身にえがつい鎧で武装をさして了つた。此の弊風は都會程その程度が著しいのであるが、何處へ行つても心の武装をした人々がどうかして自分が上に昇らうとして眼を血走らせて居る。

斯の如く個人主義の流れに抗さんとする者もないではなし。彼等は自分等の理想と相容れない現實と血みどろの戰をする。然し、逞しい現實の流れは彼等の理想をその泥水の中に押し流して居る。然し我々は幹は削られ、枝はへし折られやう共、洪水の後、毅然として自己を支へ得た事を誇る立木でありたい。

理想は私に如何に實現性に疎く共、決して捨るべきでない。何故ならば、それは沙漠のオアシスの使命を有するからだ。然らば我々は何を理想としたらいゝのか。私は我々の理想は境を滅した愛であつて欲しい。譬へ己に對する接觸の度に依り自ら少差はあつても、己を取捲く萬象に對する等しい愛であつて欲しい。榮譽利達もいゝであらう。し

所 感

豫三 堀 尾 貞 一

自分が商大に入學してより二年を経るが時々自分が蹴球部に入つて居なかつたらどうして居たらうかと考へる事が出来る。恐らく自分は「若し商大に入學せず、慶應に居たら今は何年だ」と考へて二年間の歲月の無駄に費された事を殘念がつて居たらう。

實際蹴球部に入らなかつたら如何に慘めなものであつたらうか？何故なら蹴球部生活を除いては商大と慶應の學生生活に何等大なる相異がなかつたからである。

自分が自身の考へ方で生活するのであるから、その考へ方に變化を受けない限り、その學生生活に於て相異なる筈はないのである。

自分は商大入學以來蹴球部より重大なる變化を受けたのである。

即ち團結力の偉大さと苦しさに堪へる事を知つたのである。

雑感

豫三 早野廣太郎

自分が今迄團體競技を爲した事がなかつた爲か、蹴球部

へ入つて始めて團結力の貴さを知つた事實、蹴球部は何所よりも團結力が優れて居る様に思ふ。

又凡そ苦しさの程度は限りのない者である事を知つた。

今迄自分の考へてゐた「苦しさの極限」は僅か二年の間に一度々變へられた。而も現在の自分の思つてゐる「苦しさの極限」も實は先輩より見れば、或は自分が尙練習をすれば「甚だ樂なもの」に違ひないと考へると、此の廣言が羞しい。長瀬さんが「蹴球部の本當の意味に於ける危機は三部四部の苦しみの過去を知る人全てを社會に送り出して終つた後だ」と言はれたさうだが、我々が今年當時を経験された五の方を送り出すに當つて、當時の練習の苦しさの程度を知らぬから非常なる覺悟をせねばならぬ。我々の練習を補ふものはそれ以上の猛練習以外にはないのである。

既に豫科の最上級になつて了つた。過去二年間の生活を振り返つてみると、一番思ひ出の深い事は、皆蹴球部に關する事だ。此前、「金井が一日でもボールを蹴らないと變な氣がする」と云つたのは、彼の心の奥から出た言葉と

(一) して味ふべきであらう。
豫科三年生は全部で九人、隨分澤山一緒にやつて來られたものだと思つて、われ乍ら驚かざるを得ない。これからも元氣でやつて行きたいものだ。併し人數が多くなると、それにつれて、個人としての接觸、グランド以外の意志の疏通が困難になつてゆく事實は、吾々の大いに注意せねばならぬ事と思ふ。

豫科チームが吉澤を主將、堀尾を委員長に有する事は誇るに足る事である。吾々は兩人を全力を以て助けなければならぬ。

以前の部誌を見たり、先輩達の話を聞く事は、部への愛

と信賴をどれだけ高めて呉れるか判らない。先輩の話を耳にするにつけても、自分が下級生に少しも積極的に手を差し出さない態度は恥かしい。

豫科は去年から試合に餘り負けた事がない。併し負けると、自分達の缺點が明に判る事實からしても、自分達は、常に自己の目標と現在の行程とを注意して進んでゆかねばならない。自分で實際に悪いと知りながら、それと妥協して、再び其れを豪傑風の無顧着さで飾る事は、蹴球部の精神を考へて見ると随分卑怯な事だ。併し私は如何に弱いかを此の頃必々感ずる。

(二)

僅か二ヶ年半の蹴球生活では、とても部の精神を覗く事さへ出來ない。部の求める處は實に大きな處だ。一生此れを求めて行かうと思ふ。到達する事は出來なくとも、近づくべく努力しよう。

一年に入つた時、上級生から、馬鹿になつてやれと云はれた。私は當時どういふ意味か判らなかつた。今もつて明

瞭に判らないが、次の様に思ふ。

蹴球部に入つたばかりの時、ランニング・バスをあんなにやつても効果がない等と云ふのは、俐巧な者の考へる事らしい。馬鹿になるには、功利的な考へを全部捨てなくてはならない。何の爲に蹴球をするのかと考へても、其れは自分が全身を打込んで行動して後初めて口にする資格があると思ふ。一、二年の時夢中でボールを蹴つて来て、最上級に到つて、今迄自分としては、一生懸命にやつて來たがさてその相手の蹴球部とはどんな物かと眺める時機が必ず來るのでないか、と思ふ。その時夢中でやつて來た者はそれだけ他の者より深刻に考へ、自己を掘り下げてゆけるのではないか。

美はしいなあ、と思つて夢中で愛する時代と、

あなたの心は何處にありますか、と求める頃と、
彼女は愛する價値があるか、否、俺が悪いのだ、と
自己を鞭打つと、最後に、

彼女の心の中に神の姿を見るのとがある。

(三)

考へて蹴球をやらなくては、きつと行づまつて了ふ。無考に夢中でやれる時を過すと、考へなくては駄目らしい。併し考へないでやつた時の方が私には何だか純だつた様な氣がする。今は理論めいた事を云はねば氣が済まぬらしい。理論なしでやつた時、蹴球が唯好きだからやる。で押し通した過去の方が、自分には本當の事を云つて居る様な氣がする。

が併し乍ら、考へて考へぬいて、然る後此れこそ自分の進むべき路、全人格を傾注し得べき處と感じた時、その人の態度こそ、何者にも侵されない強者の姿だ。安心して蹴球出来る人は、自分を鞭打つて、現實と妥協せぬ人だ。常に蹴球部の精神の奥に偉大な姿を求めて、一步／＼進む人。妥協は、前進すべき路の前に堤を築く。吾々の求むる處を隠す。かくして行きづまつて了ふ。丁度停滞せる水が次第に腐敗する様に、此れは恐ろしい事だ。

吾々の住む河は常に清く流れ、他の河が濁つても、出来るだけ清く保たねばならぬ。

(四)

一生、蹴球部の精神に近づき乍ら生きてゆける程、其れは深いものではないかと思ふ。私は其れに依つて審かれねばならない。『自分は蹴球部を愛する。故に其れに叛く様な行爲はすべきに非ず』と。が如何に私は弱い事か。『何處をつゝいたら、そんな音が出る』と自問する。

(五)

近頃身についた學問と云ふ言葉が、學校で度々口にされる。其れは自己の人生觀を組立て、其れに依つて巍然として行動出来る様に學問をせよとの意に思ふ。

蹴球部員は自分達の部精神といふ觀點からすれば、何事も、其れと關係づけても良いのではないかと思ふ。
(六) 秋のリーグ戦も二月餘に迫つて居る。今さら何をか云はんやだ。休の間に充分考へて、安心して蹴球出来る境地に少しでも近づかうと思ふ。心に不満疑惑があつて、傳統の精神的團結等思ひも依らぬ。吾等は蹴球部を愛する點に於て皆完全に一致して居る。部を愛し、先輩の尊い努力を思ひ秋に向つて力強く進みたい。
(七月十九日)

蹴球部生活と私

豫三 荒川守之助

振返つて過去二年間の蹴球部生活を顧みる時、私の心に浮んで來るのは唯蹴球部の一員として、どうやら部の一役割を不満足ながら先輩達の御指導に依つて遂行し得たと言ふ事だけである。而してかく考へる時、蹴球部に入つた事を心から喜ぶと共に苦しい合宿練習、霜溶けの泥濘中の熱戦等が楽しく生々と思ひ出されるのである。

私は青年期の心の故郷、私の聖なる源泉となつて呉れる蹴球部を衷心から感謝すると同時に、此所で我等が猶偉大なるものへ築き上げて行かねばならぬ蹴球部に對して、私の希望、決心を述べやうと思ふ。私はよく先輩達が過去の思ひ出としては毎日ボールを蹴つて來たと言ふより無いと言つて居るのを屢々聞いて居る。私は此の言葉の中に如何に深厚なる意味が含まれてるか知つて居る。然しそれが如何なる意味であるかは知らない。私は此の氣持を知らうと努力するのが即ち蹴球部生活そのものであるやうに思ふ。

これは毎日練習に出て蹴球部生活を了へた先輩のみが知る氣持かも知れない。

私自身としては部生活に於て、他律的、消極的になり易い。周圍に引きずられて、自律的な所がない。張切るにも周圍の張切つた氣分に刺戟されて始めて張切つた氣分になる。此は部の精神を擱んで居ないからだと思ふ。私は屢々自己の消極的な行爲によつて後悔する事がある。少く共、部生活に於ては、積極的にやつて行きたいと思つて居る。其の時には自ら豪快的なプレイも出て来るであらう。

反対意見も部の進歩の爲に必要である。此の春の練習に就て、かうやつて貰ひたかつたと言ふ希望があつた様である。私自身として感じた事は、春の練習が餘りに秋のリーグ戦にのみ窮々として部全體を顧みるのが少かつた様に思はれる。勿論秋のリーグ戦は、部全體の終極の目的であるが新入部員をも考慮に入れる時、春だけでも氣樂に心の一致をはかりたい。而して夏の合宿から全部員が一致して秋のリーグ戦のみを目的として進んだ方がよいのではないかと思はれる。

私は蹴球部と共に出来るだけの事はする。私は部に對して確固たる信念はないが、その時々に對して全力を傾注してゐる中に何か掴み得ると思つて居る。

(一九三七・六・二〇)

蹴球部生活回顧

豫二 鈴木英一

私は中學時代に、上級學校に入つたら何か運動部に入つて運動をやつて見るうと思つて居た。幸ひに商大に入學してさて何部に入らうかと迷つて仕舞つた。蹴球は上手ではないが、相當好きではあつたので入つて見た。一年の當初は唯入つて見やうと言ふ様な淺薄な氣持だつた。それから歓迎會が終り、靴も出來て愈々グランドに出て、練習が始まつた。段々と月日が過ぎるに従つて、何となく此の部は相當纏つた部だなと言ふ事が腦裡に映り始めた。

私が寮に入つて居たのは、我が部を早くよく知る爲に相

當私を助けて下された様に思はれる。それは幾度となく在

寮部員が一室に會してコムバをやつた事だ。時には本科の方々が來られて、昔の四部時代の苦心談や商大蹴球部精神等我々無知の者に色々と話して下さつた。

凡そ部生活をする者には單にグランドに於てのみの接觸では到底全部の飽和は望み得ない。其れを少しでも補ふ爲に學校に來てる間、暇の時は部室なり何なりに集つて出来るだけ接觸したいものである。

一番最初に運動をやつて居る者としての感激刺戟を、又商大蹴球部の團結力の強さを私の目前に示して下されたのは豫科リーグの對早高戦であつた。プレイ、體力等外的に見て完全に吾を壓倒して居る早高に對して遂に最後の勝利を得せしめた。——其の勝利が薄氷を踏む様なものであつたにせよ——内面的、即ち精神力の威大さ、ファイティング・スピリットの猛烈さがあつたからこそ勝つたのである。あの戦後、私は輕薄な氣持で入部した事を悔み、よし俺も一部員として頑張つて行かうと心に誓つた。夏季合宿は初めての合宿で相當に辛かつたが、合宿に於ける様に全部員が一緒に、一所に寝起きする事は各個人の間の親密を

増進し延いては部全體が繙る事になるのだと思はれた。兎に角、合宿は辛いが、又一面楽しく得る所があつた様だ。合宿も終つて次に吾部の最大の目標たる秋季リーグ戦が到来した。吾々豫科部員は全部サブとしてレギュラーを激勵し、相扶けて行くのだ。よく皆が言ふ如く試合はレギュラーが行つて居るのだが、レギュラーの力のみでは完全な勝利は望み得ない。平時の練習に於けるサブの力が威大なる効果を表はすのだと、實に名言だ。

秋のリーグ戦で感じたのは次の様な事だ。商大が、早、農、を破つて完全に一部残留が決つて後の對文大戦に於て前二試合程のファイトも出す、慘敗を喫した。あの様な氣持では一部制覇は全く艱難でなからうか。一部に殘留すればよいんだなどと、小さい望を抱いて居ると一部の殘留も危くなる。今年は始めから終り迄一部制覇を目標にしてやつて見やう。如斯してだんく部に馴れるに従つて、私は練習に出るのが楽しい位になつて來た。却つて休の日には何もする事なく、退屈で困つてしまつた。雨の日でも雪の日でも、昨年は練習はやつた。初めの中は雨の中でやるな

追 想

豫一 渡邊健

私は二日位前、病院の歸りに山手の邊りをぶらついた。明朗で、上品で、近代的で、エキゾチックで、はつきりして居て、爽やかで、美しくて、静かで、而も若鮎の様に激渾として居る神戸の町のよさを多分に持つて居るので、私が六

年間通つた小學校が在るので、大好きな神戸の内でも特に好きな一帯として、折があれば心の儘にぶらつくのである。病院は市電の下山手通六丁目の停留所の傍にある。私はそこから東に向けて、街路樹の木蔭づたひに縣廳前に出た。其處で縣女の角を山の方へ、懐しい廣々としたアスファルトの道を上つて行つた。此の港を見下す。かの大通りは私が六年間上り下りした思ひ出の道である。目の前には何時もながら緑の諏訪山や、鑓山があたり一面のバックを務めて居る。蟬の啼きしきる邊の静けさ。美しいアスファルトの道路。懐しい小寺さんの堀。涼しさうな青々した庭木、街路樹。品のある何處か明るく落着た家並。何時來て見ても變つてない此の邊りの様子は、一木一草に至るまで、ほんとうに懐しさうな目差しで、自分を迎へてくれる様だつた。學校は幾多のエピソードやロマンスを秘めた教室の窓を此方に向けて、その薄鼠色のコンクリートの肌を日の光に照らされて居た。自分はふと今日の様な日に眞晝の太陽の暑さを背中に感じ乍ら、向ふの小寺さんの堀に沿つて、友と一緒に家へ歸る自分のありし日の姿を書いて見た。六

それがさう解釋するのが正しい進み方じやないか。然し幸にも身も心も清さを守り得たのは嬉しくて堪らない。いやそれは幼い頃から此のあたりの雰囲気が養つて呉れた純潔がしつかりと自分を守つてくれたのだ。人が何と言はうと自分は此の一事を以て満足しなければならぬ。それは總て過ぎ去つた事だから。此の町や山に感謝しやう。自分は此所に環境の偉大なる力をはつきりと知つた。もうこれからは過去一年の穢れを忘れ、生れ變つて、幼い頃の自分に還らう。本當の神戸ツ子に還つて正しく、強く、清く、そし

甲風が吹きつける冬の暮方、オーバーの襟を立て、手提鞄を抱く様にして電車を待つてゐる姿を思ひ出した。自分もあの頃は本當に心の綺麗な、汚れを知らない子供だつた。身も心もすこやかに「仰けば尊し……」を唱ひ「螢の光」に送られて校門を後にしてからもう何年になるかしら、自分は指折り數へて見た。一年二年三年四年……大體七年の年月は流れて居る。七年、もう三年で十年。十年と云へば一年と昔。早いものだなあとつくづかう思つた。そして七年後の今姿を見較べて見た。それは餘りにも惨めな姿だつた。商大に入つてからの一年間の色々な事が走馬燈の様に目の前を通り過ぎた。自分は歩みをゆるめて考へた。過去の一年。溫室の花、第二の誕生、何故自分はもつと強く進まなかつたのだ。確に苦しかつた。或る人は自分の性格が一部變つたと告げて呉れた。然し苦しさを言ふのは、思ふのは、卑劣だ。色々の誘惑。或る物は本能的に來た。或る時は道德の假面に隠れて迫つて來た。それは餘りにも強過ぎた。自分は自分の身を守るのに手一杯だつた。矢張り自己の性格の弱さがしからしめたのだ。あまりにも弱かつた。

て美しく生き抜かう。希望の明星を見つめながら此の心を忘れずに努力しやう。どんな辛い事があつてもそれを避けはいけない。外から見れば敗れた様でも内では立派に勝つて居るのだ。前途は多幸だ。飛躍しやう。此所迄來た時ボートと一聲港の方から出船の汽笛が流れて來た。それは恰も自分を祝福してくれるかの様だつた。時計を見た。十時七分。急に嬉しくなつた。到底此の氣持を抑へる事は出来なかつた。「松木は何うして居るだらう。北風は」自分はまるで子供の様になつて元町の方へ下りて行つた。

話 の 泉

去年の關西遠征で、大阪の水島先輩が吾々の宿舎を訪ねて下さつた時。

荒井さん……今朝阪神パークに行つたよ。水島先輩……(無言で荒井さんの顔をジット見つめ続ける)



小平進行譜

練習の後

豫三 金井雄吾

ビツビー。「御苦勞サン」主將の言葉で練習の終る頃、武藏野の樹立の彼方には夕日が沈まんとして、空は夕焼しである。「あゝ……練習は終つたんだなあ……」其の時の氣持！別に明日のドイツ語の豫習の事を考へるぢやなし（誰だつ、お前それをやつた事があるのかい？なんて失禮な事を訊ねる奴は）リーベの事を思ふぢやなし。唯何となく漠然たる満悦感に浸り、一瞬間は楽しい失神状態に入り

ます。三々伍々肩を並べて今日の練習の事等を語り合ひつゝ、部室に歸つて行く健康な親友達を見ては、あゝ善哉、善哉、と心の中で叫ばずには居られません。

グランドのオアシスたる水呑場で、ちゅつゝとまるで戀人の頬にでも吸ひ着く様にして飲むあの冷水の美味さ！！街の喫茶店で飲む一杯十五錢也といふコーヒーよりも幾層倍か其の味のよいこと。全く蹴球の御蔭で生水の眞の味を知りました。

部屋に歸れば放談、爆笑、いやはや愉快な事。此の和合の雰囲氣は我々には最も必要です。就中田根宇麻氏のあの馳洒落、皮肉と来てはライオン演口サンでも苦笑せずには

のに氣がついて、周章で自室に戻つたことです。幸に優勝する事が出来ましたが今ではほんとうになつかしい思ひ出となりました。

何と云つても風呂は我々スポーツマンの天國です。湯槽につかつてボーツとしてゐる時こそ此の世のパラダイスです。飯を食べて後、一服目の煙を腹の底迄吸込み乍ら自室に寝そべる時こそ現世の極樂淨土です。此の時始めて今日の練習は完了したなあといふ氣が致します。 終

林田大頭氏は反対に本三切つての更衣迅速者。彼氏の發達せる運動神經は此處にも見られます。淺田G・K氏はいとも静かに漫才を學問的に心中で批判してゐられます。以上本三諸氏の練習後のプロファイルの報告終りつ。失禮に當る點は御勘辨を。

諸兄の歸られた後は急に淋しくなります。ぐつたりした身體を寮に運ぶので思ひ出すのは、昨年の高商大會の前に毎日小使室の爐端で、二階堂兄と吉澤と三人で時の過ぐるのも知らずに、あれこれと語り合ひ、飯の時間の無くなる

九月廿六日。

愈々明日だ。去年の時は前半優勢だつたのだ。そして浅枝が立原に足をやられたのだつた。今年はその仇討だ。是非でも討取らねばならぬ。留守軍でも何でも良いんだ。勝ちや良いんだ今でも未だ浅枝に頼りすぎてゐる。

秋の日記より

村井恒典

九月廿七日

勝つた！ 勝つた！ 早稻田に勝つた！ 留守につけこんだと人が云はゞ言へ。留守軍にでも何でも勝つたのだ。あゝ何て嬉しいんだらう。兎に角攻め勝つたのだ。矢張り勝たねばいかん。今晚はそれに何て蒸すんだらう。寝られやしない。深夜十二時電氣のみ暗い。

明日が楽しみだ。新聞はどうせ凡戦と書くだらう。新聞なんかどうでも良い。勝つたのだ。明日皆と會ふのが樂しみだ。眠れなければ眠らぬでもよい。實際よい氣分だ。

合宿の時はからずもR・Wを競り合つた。是非早大との試合には出場して去年の復仇をしたかつた。あんなにむきになつて練習したのは近來なかつた。そして合宿後の練習でR・Wのボディションが與へられた時は入學試験に合格した如く嬉しかつた。勝つた！ 之で蹴球部に對する義務が果せた去年は隨分神野、水島の兩兄に迷惑をかけた。之でその申譯の一部が立つた様な氣がする。

暑い眠らう。慶應戦も近い。

十月一日

十月三日

今日の試合も延びた。協會の高飛車な態度にも纏に障つた。凡公の帽子が風に飛ばされた。見ロツ！

尤もあの風雨の中でやるのは無理かも知れぬがどんな天氣でもやるのが蹴球の特長ではないかしら。一々天候に従つてやれるものか。風速何米以内ならやるんだ。

早稻田に勝つたへばりが未だぬけてゐない。案外明日に延びた方が良いかな。今のまゝでは走れそうもない。だが寝だ。

十月四日

負けた。だらしなくも負けた。然し乍らはたで見たらどうかは知らず俺は本當に勝つたうと思つてやつてゐたんだ。

少くとも必勝の氣持で終始やつてゐた事は天地神明の前で言ひきれる。だが試合中に味方の中に必勝の氣の薄く見える奴が居た様に思へたのはいやになる。プレーは拙いかもしがね。うまいまずいは試合にならないでも解つてゐるんだ。只必ず勝つたうと思つてゐるか否かは試合の時が問題なのだ。種々のプレー上の缺陷を問題にしてゐるのではない

颶風が来るそうである。去年の試合も豪雨だつた。雨が降れば我軍に有利だ。第一シユートが極るし敵のプレーは出せないし。そんなに降らぬ事を祈る。中止になつては困る。試合をやれる程度で降れ々々。

去年の試合は結局一日延して我ホーム・グラウンドでやつて負けたのだ。あれも負ける試合ではなかつたな。俺の弱氣で負けたみたいなものだ。今年は氣狂ひみたいになつてやるぞ。弱氣でミスるよりカンカンになつてミスつた方が思ひ残りがないだらう。

明日も又神宮へ行くのだ。早大戦の前に暴風の中で神宮にお詣りして鳥居の前で淺枝が涙を流して「きつと勝たうぜ」と言つた時はよかつたな。すーととした。勝たなければうそだ。

去年は戦ひ終つて水島さんに叱られた。今年はよくやつたと言はれたい。いや夫より自分に満足する様なプレーをやりたい。今では本當に慶應に勝てそうな氣がする。どうせ五六點は入れられるつもりで此方がそれ以上入れば良いんだ。

そんなものは二の次三の次なのだ。敵に氣押されしてやつて勝てる筈があるものか。折角神ケンが忙しい中を來て呉れてゐたのに情なかつた。試合中俺はカン／＼だつた。プレーが之に伴はず淺枝、大掛等々そばの人迷惑許りかけてゐたかも知れぬ。併し勝たんかの氣持は人一倍持つてゐたと確信してゐる。だが敵を怖ぢ怖れて守る事許り考へてゐては試合には勝てない。何故入れられても入れ返そうと言ふ氣が起らないのか。俺は思ふ。何點入れられてもそれ以上入れ返せば良いではないか。もつと夢中になつたら死中に活路が見出せた筈だ。

農大戦の時にあんな氣持ちになつたら事だぞ。今日は確かに敵の巧技を恐れてゐる風が見えた。零敗なんだ。このまゝいつ迄も眠つて終ひたい。

新聞は或は四點で喰ひ止めた事をほめるかも知れぬ。併しそんな事は氣にすべきでない。敵より以上に入れれば良いので相對的多數得點が問題になるんだ。澤山入れられた事に就てはバツクもF・Wも責任が有るんだ。ちつとも突つこめなかつた事にはF・Wバツク共に責任があるんだ。

バツクとF・Wと分けて考へるのは練習の時だけだ。試合の時は十一人の攻守なのだ。面白くない。この次の十一人は皆必勝の氣に満ちてやりたい。練習試合ではない。リーグ戦なんだ。一年に只一度しかないんだ。面白くない。只面白くない。

十月九日

豫科は試験だし本科も疲れを愈す爲に今週は休みだ。

オリムピックの事に關する記事を讀んだが非常に良い事が有つた。

外紙曰く「日本の選手が勝つと自分が勝つて嬉しいと言ふよりも先ず責任が果せた。國家に對する義務が果せたと云ふ氣持ちになつて自然々々に頭が下る」と。

又マラソンコーチの佐藤氏の談として「走る事は馬がより以上速い。決して速かつた事が偉いのではない」と。

「競技は速いだけで勝てるのではない。我武者羅とか所謂平常の膽力の養成がうんと出來てないと當日は駄目になる」ともある。

又曰く「選手がへばつて來ると何も見えない。その無我

夢中になる頃のオールの引き方で負けたのだ。之は練習の結果だ。練習が出來てゐればフラフーになつてゐても手の引き方は無意識に出來てくる。日本は基本練習が充分でなかつた」之はボートコーチ東氏の談である。

どの運動も結局眞隨は同じだ。

日本人は神の前で戰ひ、優勝は結局神が與へるものである。早大の試合の前の淺枝主將を思ひ出す。慶應に負けたのは技葉の事が問題ではないので各自神の前に出て恥しくないプレーをすれば良いんだ。

十月卅一日

頭髪を刈つて來てサバサバした。石井のあの巨大な身體を思ひ出す。ハーフを思ひ出さぬ所を見ると大した奴でない。必ず勝つ。只それだけだ。

十一月一日

昨日はよく寝られた。

前半真先のチャンスをゴール前一尺で逃した時は只阿然とした。之が士氣に障つた事は非常なもので前半二対〇と離された時は全く之は大變だと思つた。だがハーフ・タイ

前半壁みたいたバツクに會つて球がキープ出来ずチャンスも偶發的だつたから之はいかんと思つた。見てゐるもの

から後半やり方を變へるべく進言を期待してハーフタイムに臨んだが、何人も何も言はず選手達はこのまゝ元氣に行かうと言つてゐた。だから餘計な事を言つてチグハグになるといかんと思つて黙つてゐたが、あのバツクに對する攻方はもつとあつたと思ふ。あれでは滑るグラウンドで背後許り使つてゐて駄目だ。もつと前を使はなければ。後半の終り頃や、連續的にチャンスの出來たのは大掛の前を使つたからだ。あのバツクに對しては大きなパンントを敵のF・Bの背後に落してF・Wがスピードで抜くのが一番良かつたらうと思ふ。小さなバスで一人や二人カモつてもどうもならぬ。下は滑るのだからあのウエイトのあるバツクに對して味方の背後許り使つて攻めても破れるものでない。へ

ムの時に皆の顔を見て大丈夫だと思つた。之ではね返した
ら愉快だらうと思つた。だがもし負けたらどうなると思つた、とに角勝つてよかつた。
神ケンの話、松本さんの話、何れも皆愉快の極。皆の愉快な顔が見られる。

十一月七日

明日は帝大だ。落ちる心配はない。皆餘裕を持つてやれるからきつと良いだらうと云つてゐるが、こんな時が一番負け易いんだ。たとへうまいプレーが出來ても勝つ事と其れとは別だ。人間は切つぱ詰つた時は異常な力を出しが餘裕があるといかん。まさかあの農大に負けた帝大に負けるとは思はないがもつとく切迫した氣持でなくては危い。
去年の文大戦、帝大戦、先の慶大戦、皆餘裕があつて敗れた。今度もそんなにならねばよいが、第一バツグの中に確かに入れといった所のユニフォームとバイクのないのは如何なるわけか、氣にかかる。明朝早く豫科へ行つて見なけばならぬ。

藤岡は外に弱い。森は去年はカモカツタ。

— 65 —

ツドもかなはぬし。

腐つた。俺が入つてから帝大と慶應には一度も勝つてない。

十一月廿七日

明日は文理大だ。勝てば三位になれる。荒井、小西の不出場はでかい。尤も代りで補充出来たけれども、池尾には可哀そだつた。

十一月廿八日

一體何點入れられらう。七點だそうだが。最後の試合に味噌をつけた。實際力の入れ所がなかつた。どういふ風にしたらよかつたのだらう。兎に角俺は何をしてゐるのか分らなかつた。球に觸れる事すら出来なかつた。

後半二對二にするチャンスが兩三度あつた。あの時極めていたらな。

三ヶ月の緊張は辛い。荒井が風邪をひいたのも結局それだ。その上二時間半もの所を毎日往復したのだから。普通の人ならもつと早くのびてしまつたらう。確かに我々はシーズンの最初程張切れなかつた。俺達からファイトを抜いていたらな。

たら何が残る。一生懸命張り切らうとしたが駄目だつた。今日は本當に駄目だつた。

今度の三商大戦の時は思ひ切りへべつてがつちりやつてやらう。神戸は強い。充分休養して完全な試合振りをしてやらう。

春の合宿徒然草

林田毅

まへがき

春まさに酣、櫻も綻びんとする彌生二十八日より卯月の五日まで武藏野の一角小平にて若人二十有餘名相集ひて合宿をなす。終りの一日を除きてはいとのどけき春日和「けまり」などせんには勿體なしとぞ覺えけり。人里離れし林間の住居なれば出家俗世を逃れて修行致すにさも似たり。されど合宿なるもの苦しき中にぞまた醜醜味あるものなり。

何の爲めに

合宿は苦しいものに決つてゐる。出来る丈け苦しむのが合宿の合宿たる所以なのかも知れない。あんまり苦しく辛

い目に遇ふと、人間といふものは何の爲めにこんなに苦しむべきならないのかと考へる。さあ何の爲めにあんなに苦しんで吾々は合宿なんてものをやるんだらう。人情の常として誰しも苦しい目には會ひたくない。出来る丈け樂をしたい。では何の爲めのだらう。

そりや全一橋の名譽の爲め吾が蹴球部を強くする爲めさていへばそれ迄の様な氣がするし又實際至極尤もである。誰も否定は出來まい。併し何だかあまりにも漠然としてゐて捉へ所のない様な氣がしないでもない。それよりもこう考へる方が小乘的だが眞實に近いんぢやないか。長瀬大先輩を筆頭として幾多の吾らの先輩が、それこそ血と涙で築き上げて下さつた尊い榮えある吾が蹴球部の歴史と傳統を守らねばならないのだと。否守る丈けでは駄目なのだ。より輝かしいものとするのが吾々後裔に與へられた義務であり権利であるんぢやないだらうか。

と、こう考へてみてもどうしても辛くて仕方がない、馬

鹿らしいなんて心秘かに思つてゐる人は、この偉業翼賛に加はらない事だ。

何の爲めにやつてゐるんだなんて事は、全然考へないで又考へる必要に迫られないでやつて行ける人は幸福な人だし、以上の様な事は意味のない事だらうし、意外の事かも知れない。

先輩の御訪問

田島、森田兩先輩と角田、荒井兩先輩が一日おいてはるゝ合宿所を訪問して下さつた。前の兩氏は學生服でいらつしやつたが、後の兩氏は颯爽とした背廣服、吾々學生は斷然壓倒されたです。どうして前の兩氏が學生服でいらつしやつたかといふと、大きな聲ではいへないが定期乗車券御使用の爲めだそうだ。

何時の合宿だつたか先輩は來ないでもいいから菓子送れなんて言つた奴がゐた。汗まみれ泥まみれでクタ／＼になつた合宿人には寝る事と食ふ事丈けが樂しみなんだ。そこらに一寸何か食ふ所があるつていふ様な便利な所ならいざ知らず、三錢のシロツップで我慢しなければならない吾々に

とつて、人間先輩の御訪問より中村屋の饅頭の御訪問の方が、そういうつちや悪いが數倍有難いといふのが本心なのも無理ない次第ではある。だからもつと突込めば先輩が體丈けで、お出になつたらさぞかし皆ガツカリする事だらう。

痩せ我慢

合宿何日目だつたか、淺枝先輩を吾ら本三の五人が代表で東京驛に送つて寮に歸り着いたのが一時過ぎであつた。春といふのにその晩はとても寒い晩だつた。

「おい風呂に入らないか、まだきつと入れるぞ」

つて言ひ出したのがSだつたか。

「さうだ入らう、ちや二人で湯加減をみて來やう」とMとSが見に行つた。大丈夫入れるとの報告だつたので吾々五人タオルを持つて風呂場に急いだ。何でも早いMが真先にザンブと許りに湯ぶねに入つた。

「どうだい湯加減は？」

それゆけと斗り續いて入つたのがTだつた。

「ウーンい、湯だ」

よーしと次に入つたのが何をかくさうこの我輩だ。ウヘエーぬるい湯だ。腹が猛烈に冷える。ひどい野郎だ。こんなぬるい湯をいゝ湯だなんてぬかしやがつてと思つてゐる

と、

「どうだい林田」

Sが裸でやつて來た。

「ウンともいゝ湯だ」

癪だから俺もジヤブ／＼さもさも氣持よささうに答へてやつた。

「ウヘエーひでえ野郎だ」

Sの悲鳴が直きに聞かれた。その時のSの面といつたら見られたものちやなかつた。俺もあんな面して入つて來たのかと思ふと情くなつて來た。

「ざまあみやがれ」

と三人でSを彌次つてはみたものゝ自分ら寒くて仕方がない。ガタ／＼歯の根もあはない位四人共震へ乍ら風呂場を飛び出して蒲團の中にもぐり込んだ。OはSの悲鳴でとう／＼入らなかつた。

あんなぬるい湯に入ったの生れて始てだ。蒲團に入つて暫らくは四人共ガタ／＼震へてゐたつけ。
皆風邪をひくだらうと思つてゐた所、最後に入つたSが一寸やられ、この我輩が一寸頭痛がしたつ切り。後のMとTの如きはケロリとしてゐた。目茶をしたものだ。併し合宿ならでは起らない悲喜劇だ。

英語

何もやる事がないと人間何かしら考へ出すものだ。禁句を作つてそれを言つた奴はチエリーを一本とられるつてのがその一つだ。いゝ年をしてと笑はれるかも知れないが、こんな事でもしないと退屈で仕方がない。

英語を使つちやいけない。之には随分弱らされる。こうなるとタバコは「スペスペ」となるし、マツチは火附木と言はなくてはならなくなる。チョイ／＼言つては煙草をとられる奴は口惜しいものだから、教養が高いとつい英語が口に出て仕方がないねなんて言ふ、自分の不注意な事は棚に上げて。

こんな遊びをやつてみると成る程如何に澤山日本語の中

むすび

僕もいくたびか合宿をやつて來た。あと今年の夏の合宿で一生合宿なるものともお別れだらう。確かに苦しいものだ。傍からみてゐたら随分目茶をするものだ、よくみんなに體が續くものだと思ふだらう。親が見たら直きに止めろと言はれるかも知れない。併し苦しかつたには違ひないが思ひ出に残るものは、苦しかつた、辛かつたの、それよりも樂しかつたものだけだから妙だ。といふより苦しかつた事も思ひ出となると樂しいものとなるといふのが本當なのかも知れない。

どうもつまらない事斗り。枯木も山の賑ひとか。乞御容赦

(一一六、四、一三二)

富浦の一日

豫二 茂木 利孝

八月十一日夜。

今日は朝からよい天氣だつた。もう富浦へ来てから六日たつてしまつた。明日歸りかと思ふとあつけない様な氣がする。海はよかつた。でも思つた程海に親めなかつた事は淋しい。

今日は夕方から皆とヨツトを走らせた。夕風であつたがそれでも船はすいゝ沖へ出て氣持がよかつた。俊ツベ、敏坊等の女の子連が一緒に行つたのも嬉しかつた。俊ツベと狩さんの間には何やら嬉しい話があるなんて事は俺は知らない。夜大ちゃん、お嬢さん、ボイン(柔道部)と麻雀をやつて千五百位沈んだ。麻雀を終へてから海へ散歩に出た。あつ流れ星だ！ 満天星をちりばめた中から一つずいと流れる。海岸へ出るとさつき出て行つたカンペイさん達とばつたり會つた。暫く一緒に漁火を見る。暗い海面に赤い火がぼつと先る。軽て米さん、堀尾さんと一緒に濱に沿

つ歩いた。濱には人影一人見當らぬ。静かな晩だ。波も殆どあるかなしだ。又星が流れた。何かしんみり話して見たくなる様な晩だ。人生について何か米さん、堀尾さんに聞きたいと思つた。暫くして堀尾さんが山田が部をよした時にもそんな話ををして居たと言つた。そして理論と實踐の問題について世の中には理論を先にして實踐を後にする人と、實踐から理論をひき出す人とあると言つた。此の言葉はともすれば考へばかり先きばしつて實踐をかへりみぬ自分にとつては痛い言葉だつた。

米さんが「俺達は理論に行き詰つたら、夢中になつて球を蹴つて見る可きだ」と言つた。俺も夢中になつて球を蹴つて見やうと思つた。

米さんに又「君は本當に泣く事の出來る人間かい」と聞かれ、俺は「出來ない」と答へた。

米さん、堀尾さん達こそ本當に部の爲に泣く事の出來る人だ。否泣いて來た人だと思つた。純粹な氣持で泣く事の出來ない自分を辱しく思つた。そして夢中で球を蹴つて見

やうと思つた。

もう十二時過ぎだらう。隣で天神さんがいゝ氣持で寝て居る。隣りの水泳部の聲も止んだ。寮はひつそりとして居る。波の音が聞える様な氣がする。あゝ明日は東京か。

爲には自分と言ふものを美化してゐては駄目だ。

お互に眞の自分と言ふものをさらけ出し合はねば駄目だ。その爲には何よりも氣取ることはいけない。氣取る人は或る線以上に近付けない。そこまで行くと此方は歩調をゆるめ遂には立止り、引返さねばならないから……と私は思ふ。

▲一日の生活にすべてを忘れて緊張する時間を持つ者は幸福だ。

その意味で我々蹴球をする者は羨ましい。誇つていゝと私は思ふ。

▲自己を曲げ、自己を偽る事程不快なことはない。だがしかしこのことは一つの協同團體たる蹴球部に於ては屢々當嵌らない。否當嵌めてはならないと私は思ふ。

▲蹴球部員は蹴球部の中からほんとの親友を求めるべからぬ。得なければならぬ。生涯の友を得ること程幸福なことはない。眞の友を得る

私は思ふ

本一 池尾 隆二

▲一日の生活にすべてを忘れて緊張する時間を持つ者は幸

福だ。

その意味で我々蹴球をする者は羨ましい。誇つていゝと私は思ふ。

▲自己を曲げ、自己を偽る事程不快なことはない。だがしかしこのことは一つの協同團體たる蹴球部に於ては屢々當嵌らない。否當嵌めてはならないと私は思ふ。

▲蹴球部員は蹴球部の中からほんとの親友を求めるべからぬ。得なければならぬ。生涯の友を得ること程幸福なことはない。眞の友を得る

爲には自分と言ふものを美化してゐては駄目だ。

蹴球部に對する批判は善きにつけ、悪しきにつけ、部を代表する一人として直接耳にせねばならない。隨分痛い所をさゝれることもあつた。又同クラスの連中に對しても單なる「自分」としてではなく、蹴球部員として話さねばならぬことが多い。

こう言ふ時力強い味方となつてくれるものは輝かしい部の歴史とそして部生活に對する強い自信と誇りとであつた。

此の自信と誇りさへ失はぬ限り、どんな時にも強く部を主張出来るものだと知つた。ともあれ寮生活は此の上ない良い経験と修養とをさせてくれるものだと私は思ふ。

蹴球攻撃編

本科三年 村井恒典

攻めるは守るなりと云ふ言葉あり。之は精神的な意味を持つものであつて形式的にはどうかと思はれる。押切りでゐて逆襲で負けたと云はれる事あり、この場合は押切りでゐた方は中盤に強く、勝つた方はゴール前が強いのである。押切りで而も勝つのは大剛横綱の強み、逆襲で勝つは潜水艦にもたとへんか。勿論中盤はゴール前への過程であるから勿論大切であるが要はゴール前である。現在の商大が要求されるものはゴール前である。之は決して中盤が強き事充分なりの意味ではない。四ツ相撲にはすきが空くからである。と云つて中盤を如何に練習しても、此處一二年間は急速に先進チームには付く可能性がないのである。故に苦手の中盤戦を出来るだけ省略して、直接ゴール前に達し立ち所に極めるのである。

數年前立教が三位になつた時はこのやり方であつた。而らば如何にして之を達するか。

第一にスピードである。經濟學に靜態と動態とある如く蹴球にも靜と動がある。大切なのは動態である。今例へば球のバックからインナーに出たとする。インナーが完全に之をコントロールすれば一瞬静態に入る。而して敵のバックが直ちにインナーをアタックすれば再び動態にはひる。構えて見て居れば静態が續く。扱てインナーは敵の攻撃を避けて味方に

パスする。この瞬間から既に中盤戦を後にして寄せに入つて終ふ。たとへゴールへの距離が如何程あつても。所謂うまいチームは中盤をなるべく長くしてゴール前迄持つて行く。中盤のましいチームは、敵陣の一寸の亂れをついてスピード出来る丈けのスピードでゴールに寄せねばならぬ。この爲には全速力疾走中の球の操作を研究する必要がある。全速力で走つてゐてシューートをするセンタリングをする。敵を抜くにも町寧な逆モードとフットワークに頼らずにスピードで突き抜けろ。斯る攻方は所謂單純なものであるが又非常に効果のあるやり方である。ゴール前でよくかこんでどうのこうのと云ふ事はなくなるショット一本球で極める。之が中央破壊の時はゴールキックかゴールインか。ウキングが行ふ時は逆サイドのウキングは特によく走り、逆側のゴールキックになる球を全部處理する位の氣持でやるのである。ウキングの走路が非常に變つて来る。逆から來た球を中へかへすのでなく極めるのである。この事を考へて走路を研究すべきである。

スピードを出す事に就いて特に注意を要するのは、キックアンドラッシュである。蹴つたら走る。すぐ走る。球を見ずに。之で數米は敵に先んじて走れる。之をやらないとFWは一人づゝラインより遅れてしまふ。農大はよく走つてチャンスを作つたが結局之であつた。以上の方は勿論、へばるやり方である。走力を必要とする。殊にへばつてからの走力を必要とする。蹴つてすぐ走る。之は考へて出来る事でなく練習に練習を重ねて無意識の中に出来る事である。蹴つてすぐ走ると云ふ事と同時に大切なは球を受け取る際に特にスピードをつける事である。此處で停らない迄もスピードを遅らせると折角動態化して中盤を省略したのが何にも役に立たなくなる。この爲にはプレイヤーが各々自分の前を適當にあけておかないと出来ない。この方法の練習は後述するが前をあけるとは如何なる事かを説明する。豫め自分の走るべき方向を考へておくのである。そしてそこを走り抜けるのである。必しも敵と離れてゐる必要はない。敵の前を一步早くつゝきる

のである。球を取り戻る様では之は出来ぬ。この時はその人の位置も悪いし、パスも悪い。常に前を明けておく。自分の進路を考へておく。之が大切である。

この練習方法はストツビングの癖とキツクの方向をより知つておく事である。前者はショートキツク及びフォーメーションの時、後者はフォーメーションの時にこの角度に走つてゐるとこの方向に蹴れる、この方向にこんな球を蹴るにはこう走らねばならぬと云ふ事を氣を付けておく事である。前を塞いでおくと兎角プレーが止りがちである。そして球をとる時には可成敵の前へ出て、飛び出して受取る様に日頃より氣を付けておく事である。勿論それには味方の癖を充分に研究しておくべきである。

ゴール前でスピードを殺すのは愚である。よく立止つて球を待つ事がある。折角中盤からもつて來たスピードは利用してゴールの中に駆け込む様にすべきである。球が後ろに來たら困る。オフサイドを氣を付けよう。と云ふ如きは何にもならぬ。虻蜂とらずに終る。後に氣を使ふべからず。特にセンターとウギングはしかし。又蹴る方も中で全速力で走り込んだりやつと取れる様な球を蹴るべく努力する事である。蹴球は幾何や將棋の如く理窟通りのものでない。萬全を期して球を持つて行く事を考へたら少し當が違ふ。山感のプレー、力一杯夢我夢中のプレーで調和すべきもの。考へながら調和を保つものでない。而しその爲には練習が大切な事である。ぼやぼや練習してゐても之は出来ぬ。出來ても遅い。味方同志思ふ存分の事をやる中に段々出來て来る。練習試合では出來ない。フォーメーションをやらなければ出來ない事である。單に形式的にショートキツク、次はランニングパス、之が済むとシューティングと云つた練習では駄目だ。今度はランニングパス、之が必要なんだ。はり切つて行かう。シューティング、之でこんな事をやらにやあいかん。がんばらう。と云

つた具合に一つ々々に氣分を一新して行かねばならぬ。だから或る時には初鼻からフォーメーションをやつても決して差支へはないと思ふ。やるものさえしつかりしてゐれば。

巧みなパスワークで敵をまわすのも一方なれど、又他方無茶苦茶に立つてその勢ひで駆けぬけるのも一法である。

【ウギング】

ウギングは一番端に居る。戦況がよく分る。じれつたき事有り。この時じれては先ず駄目である。同時にウギングが中の者に餘りに註文を出す事はよくない。ウギングは中の者のプレーをよく見てゐてそのやり方をエクスペクトする。そして自分の行動をやつて行く事が大切である。

フルバツクの一人位常に抜いてやる氣持ちで居たい。ショートボール以外では絶対にゴールアウトせざる事が大切である。それからコーナーキツク位は中の者の意に満ちる様なのが蹴れなくてはいかん。

或る一定の方向からのシュートは必ずきまつて同一型をとる様にしておくべきである。彼はこの形になつたら必ずきめると云はれる如く、それに應じてゴールに向つて走る方向の研究が必要になつて来る。之はよく無視される事である。走り方は最も大切だと思ふ。よく戻る事が必要である。自分はウギングだから戻らぬでもよいと思ふのは間違ひである。戻らないと他のF・W殊にインナーの疲れを早めるし、又バツクよりの球を取りに下つてから再び前進を起さねばならぬ。之は時間の非常な浪費であるし、又つまらないやり方である。ポデションの取り方は研究に倣する事である。そして何時も敵の配陣をよく見ておく事である。押された時等によく見ておく。

インナーはやつた事がないから書けないが、動きすぎと言はれる奴に氣を付ける事だ。球の後許りついて廻る事になり何にもならぬ。へばる許りである。それからF・Wの一員なる事を思ひ、ゴール前のプレーをあきらめぬ事、インナーはシュートの角度が廣いのであるしキーパーのブランドの事多きを思ひ自由なシュートをするべきである。ウギングの場合は或る一定型のシュートなるに反しインナーは四方より相當の球で蹴る様に努力すべきである。非常に効果のある事は蹴る當人より守る方の人聞いて見れば分る。

センタースリーの中央突破は、インナーの必要以上の前走りによつて出来るので、フットワークで敵をまよわせるのが根本ではない。試みにインナーがよく走つてセンターの前に出て球を受けて見よ、大ていのバツクは縦を割られてゐる。この例はこの春文理大の時の大掛、金井の得點の時のダッシュである。年中やれとは言はぬが、適時に之を行ふべしである。辛いであらう事はよく分るが。

インナーは球をうけたらグランドを廣く使ふべきだらう。球のない時はその代り餘り廣く使はぬようにして。體力の配分と云ふ事はインナーに特に必要な事であらう。逆襲の時は何れか一人のインナーがウギング、センターのラインに間に合つてゐれば良いと思ふ。之は球の搬出に携さわらなかつた方のインナーが早く進出するのである。之でW型の先端の三人が四人になるのである。この位の氣持で走つて丁度間に合ふのである。

【セ　ン　タ　】

センターに必要なのは、前に出る力の強い事である。小細工を弄するよりも強引に前に出る事である。同時に極め球を持つ事である。

前に強くなる事は後のプレーを犠牲にして宜しい。センターが後ろを氣を付けるとプレーが中ぶらりんになる。後ろはインナーに任せて前に強くなる事である。例へばセンターリングボールを待構へる時に、前方にのみスタートをつけて深い球をぽかんと突つ込む。之だけで充分だと思ふ。真中の而も最前方に位するセンターは、周囲の動きに順應せんとするのは失敗に終る。獨特のプレーを確立する事である。徒らに右顧左顧してゐては役に立たぬ。縱に突貫く力が必要である。

センターは横に走つて球を取る事が有る。之は仲々よいプレーであるがすぐ前のボディションに歸らぬと駄目である。又捌くと同時に走る事は最も必要である。年中だらく動くのと、鋭く節度をつけて動くのではセンターに於て特に差がある。

斯る事はよく起る事である。例へば左インナーよりセンターへバスが出る。之が少し後ろ目に出了とする。之を取りに戻つて又持ち出す。之はセンターのプレーでない。その球は右のインナーに任してセンターはもつと先の方へ走つてゐるべきである。センターのスピードが鈍つたらF・Wの攻撃はとぎれる時である。

以上で雑ではあるが僕の考へてゐるフォワードは役者が揃ふ事になる。そして斯る五人が集るとあるフォーメーションが出来る。このF・Wの特長は早く走る事と走り乍ら球を蹴る事が目立つであらう。そして華麗な所はなくとも荒げづりな元氣のある様なチームが出来るだらう。試合はスピードに運ばれるだらう。此處二三年の商大F・Wの進路は斯くありたいと思ふ。



新入生所感集

★



★

隨想

豫一 清水和雄

人生は樂と苦をもつて敷いた道だといふ諺があるが、僕は人間は苦しめば後に樂を得られると思ふ。すなはち樂あれば苦あるの反対なのであるが、例へば、何でもそうだが我々學生にとつて見れば、試験をする時に始めて頑張つて苦しんでおくとあとは樂である。

名は忘れたが或る僧の問答の中に、

- A 「どういふつもりで念佛をとなへるか」
B 「往生しようとして」

A 「はじめから利益を得んとしてゐるやつがあるか。それでは往生はできない」
B 「それではどういふ考へで」

- A 「ひたすら念佛をとなへてゐればよいのだ。たゞそれだけでよいのだ。どんなつもりでなんて考へなくてもよい。それで成佛できるのだ」

といふ事を聞いた事がある。

我々は蹴球をしてゐるのだ。我々にとつて見れば前の話はたゞ蹴球を一心にやつてゐればよいといふ事になる。もつとも蹴球と佛教が關係があるかどうか知らないが。

しかしはじめから樂をもとめようとして行動してはならぬ。我々の蹴球するのは、そのようにするのではない。たゞ血と熱をもつて一心にボールを蹴つてゐればその時が楽しい時なのだ。そして我々は一日々々の練習によつて何物か楽しい物を得て行くのだ。

以上拙い事を書きましたが御赦し下さい。勿論僕はこの神聖な蹴球は大好きだ。又この蹴球部も好きだ。これから六年間蹴球をやる決心だ。

所感

豫一 居川達一

- 79 -

部の皆さんあの眞剣さにグン／＼引きづられて行く自分に驚く。

内心の相剋にも拘らず「やるんだ！」といふ分解出来ない而も壓倒的な氣分の湧然と盛り上つて來るのを感じる。

兎に角僕は部に溢れたあの純粹は闘志が好きなのです。そしてボールを蹴るのが好きなのです。

過去一學期間には上級生の所謂「何物か」は把握し得なかつたが、兎に角全身をサツカートに打込んで過して來た事に大いに満足して居る。又商大がよく他の大學に伍して行けるのは、技術に非ずして寧ろその精神力と練習に依るものであるといふ事を感じました。

遇感

豫一 藤塚亮策

僕は唯夢我夢中でボールを追ふのが堪らなく嬉しいのです。

感 想

感 想

豫一 山形 登

豫一 清 上 明

クツキリと晴れた碧空に、眞白な綿雲がたなびき、木々の末葉がサラノヽと春風にはしやぎ、綠堤につゝまれた水流が勢よく流れて居る。その邊のグランドで始めてボールを蹴つた爽快さはサツカーへの私の忘れられぬ第一印象でした。

部の精神も、入部以来、度重なる試合毎に把握され、それと共に、サツカーには何よりも精神力といふものが、大切な事がしみぐと感ぜられました。何事によらず、精神力こそ目的への第一歩だと信じます。強固な精神力の前には不可能はないだらうと思ひます。

四月以來、上級の方々に伎倆的並びに精神的に色々と御指導を受け、益々努力奮闘せん事を期して居ります。

束縛された長い辛い受験勉強を終へて、漫然と好きな蹴球をやらうと入部してしまひました。入つて驚いた事は商大の蹴球の強いことでした。中學時代は商大の蹴球などはちつとも知りませんでしたが、入つて見ると部員は多いし練習も眞面目で、部がよく團結して居て大學では一部だし豫科リーグでは優勝して、すつかり嬉しくなりました。試合をみて居ても技術よりも團結の力で勝つて居て嬉しかつたです。でも高校などにはファイトで劣ると言はれるのが残念でした。入部した當初は一寸不満を感じたこともありましたが、今は段々考へが變つて來て、そんなことは感じなくなりました。今まで怪我をしたりして自分でも思ふ存分に練習が出来ず、申譯ないと思つてます。之からは出来る限り頑張つて部の爲に盡して行く決心です。

感 想

一年五組 岡田昇

去る四月、希望の學校商大に入學し得て、上京する時は未だ何部に入らうとも考へては居なかつたが、何か一つ運動部に入つて身心を鍊る事の必要な事は充分知り抜いてゐた。無爲の中學校五ヶ年間の生活の弊害に依つて。

愈々學校も始つてから、廣島一中の諸先輩、其の他蹴球部の人々から勧誘を受けて、自分も中學校の時にはゴムのボールを少しばか蹴つた事があるのでから蹴れない事もあるまいと思つて入部した。

扱練習が始つて見ると——それも基本的なものから順序正しく進んでは行かなかつたが——兎に角放課後の二時間の蹴球は少くとも身體の出來てゐない僕にとっては過勞だつた。夜机に向つてゐても自然に頭が机の上の本迄下ると「ハツ」として又睡い目をこすり乍ら本を読む。足は痛くてだるく、その上豆はどんく出来る。幾度蹴球を中止してやうと思つたか知れない。

次第に日が経つにつれて豫科、本科と全部の者が一致團結して眞面目に黙々としてボールを蹴ると言ふ蹴球部の特徴がはつきりと自覺されて來た。

斯くの如く優秀な蹴球部に入つた以上、此の良い部を活用して一生懸命に黙々とボールを蹴る事に依つて自己の人格の陶冶の一助としようと思つてゐる。

夏日雜感

豫一 村木杉太郎

うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名残ぞと

目も遙かにのびる海原、袖から出た白雲。

「白雲の遙か彼方や夢の國」

ぼんやりしてゐるうちに夏休の三分の二も過ぎてしまつた。だが夢はさめずにそれからそれへと夢想は續く。夢と云ふものは實によい。殊は夏の眞晝の夢は若者の胸をこがす。

藤村の詩に、

花橘の袖の香の

みめうるはしきをとめごは

眞晝に夢を見てしより

さめて忘るゝ夜のならひ

白日の夢のなぞかくも

忘我がたなくはありけるものか

ゆめとしりせばなまなかに

さめざらましを世に出でゝ

問はば答へむ目さめでは

熱き涙のかわく間もなし

と云ふのがある。日は進んで合宿も眞近に迫つたが、乍ら今夏は特に名残り惜しく別れ難い思ひがする。白日の夢は過ぎ去つて歸らぬが、それ故になほさら忘れんとして忘られず胸に頬に腕に思ひ出はやきつく。

早く合宿でもやつて思ふ存分ボールを蹴つて無茶苦茶に暴れなくては……

以上。

感 想

豫一 水島行

豫科リーグに於て、選手の方の奮闘、並びに本科の方々の御指導振りを見て、實際嬉しく又力強く感じました。後を受け繼ぐ私達も熱と意氣を以て邁進致します。私は何の

信念も無く、漫然と入部しましたから、或は障害に、或は

矛盾に出逢ふかも知れません。先輩諸兄の猶一層御指導下されん事を御願ひ致します。

入學

蹴 球 隨 筆

豫一ノ六 宮澤 力

「蹴球部は外の部と違つて纏りのいい、よい部だ」と僕は或る先輩から言はれて、どうせ運動部に入るならと（始めはこんな氣持だつたのです）何の氣も無く全然未知の蹴球部へ一步を踏み出しました。入つて初めて僕は或る物を感じました。殊に對慶應豫科戦を見て、僕はつくづく感じました。此の部で、此のよき先輩の指導の中での生活が實に愉快に頼母しく感じ始めたのです。きつとく諸先輩の意を帶して一路邁進致す積りです。いや必ず致します。

五月

ボーンとボールが空高く跳ぶ。又跳ぶ。心臓の奴が足の先に行つて仕舞つた。あゝかよわきハートよ春だ！早く芽を出せ。若葉は、グランドは、雲雀はボールに向つて微笑む。春は、そしてユニホームの亂れ跳ぶグランドは全く此の宇宙間の唯一つのパラダイスだ。誰だ!! 井の頭だなんて云ふのは。ありもしないくせに。一度グラン

ドに出て球を蹴つて御覧なさい。すぐわかりますから。

×

六月

夏だ!! さうだ春の次は確かに夏なのを思ひ出した。太陽は春に倍して吾々を照り付ける。蹴球部にや白い顔なんか見たくとも居やしない。誰か知らざる榮冠涙ありとは。商大だから、それだから豫科リーグに優勝したんだ。

或人曰く「強き者よ汝の部は蹴球部なり」と。

一學期間の入部生活を 顧みて

豫一 建 部 正 一

よく「奇しき運」といふが、僕もこの奇しき運に依つてサツカー部の一員となつた。もしあの體格検査後の印刷不鮮明な薦半紙に第一志望をサツカーにしなかつたら、今はどこの部をどうさまようてゐただらうか。或はホッケー部

に入つて次回オリムピック出場の淡い夢を懷いてゐたか、そうでなかつたら音楽部に入つてチンドンヤより下手なクラリオネットでもふいて悦に入つてゐたかも知れない。しかしながら自分を考へて見ると、恐らく何處の部にも入つてゐない浮浪人になつてゐるであらう事は凡そ想像に難くないのである。何故といふにこの有難い——こいつは御世辭でもなんでもない、上級生、下級生ほとんど區別つかぬ程親しみ合つてゐる。中學の時なんか先輩がくるといふとげんなりしたもんだが——サツカー部に於てすら今何の後悔する事のない程自分でも熱心に練習をやりぬいてきたとは到底斷言出来ないし、終始落着かぬ生活を送つて來たからだ。従つて業も少しも上達してゐない事を此の紙上で深くお詫びしたい。

どうしてこんなに落着かぬ生活をしてきたか?——それは文句をつければ色々あらうが——要するに肚が出来てないのと心臓修養の不足からであることは言を俟たぬ。しかしどうもいらぬ所に義侠心が芽を出すもので色々なことに手を出して悩まされた。クラスチヤンと部生活、記念祭と

部生活、あの時は此等の事が頭痛の種だつた。又それより學問と運動部生活といふ事にも覆ひがたい疑問が存在してゐたと少くとも僕は考へてゐる。應援に出かけるのにも初めの中は出足が鈍つたのも確かだ。しかし豫科が立教、慶應を破つた時の快感、浦高戦の時の躍動的な氣分、それから農大を破つて豫科リーグ優勝の感激とで、俺もやるぞといつた。やつと部生活に没入出來たやうな氣分に蔽はれたそれは先輩の努力に依つて得られた榮譽に對する當然の義務的觀念を超越した、本能的な心の動きであつたに違ひない。その爲だつたかあの時の寮生の旅行等は正直に言つて現在の自分に未練の一片をも殘してゐない。ともかく僕等の入部の第一歩に印象づけられ、かざられたこの輝かしい優勝こそ、我々の永久に記憶に刻まれ、時にふれて反省の糧となるべきものである事を疑はない。

商大へ入つた第一義的意義は勿論學問にあらう。しかしこの學問を廣義的に解釋した學問といひたい。體をねる事も當然その一に數へられやう。部生活の餘暇にやる勉強がかへつてまとまつたものが出来るのである。暇が充分あつ

感 想

豫一 根 本 大

て勉強しようとも中々出來ない。勉強をしようともと思つて夜を明しけりならまだしも、勉強しようともと思つたが、面倒くさくなつて遊んでしまふ方が多いのである。それがあらぬか僕も夏休には、一つと思つて猛烈に机にかかりついたら何から手をつけてよいやらわからぬ。結局一橋會名簿を見て、やはり石割さんは映畫研究會に入つてゐるなあと感嘆したり、ゼミナール名簿で本科のサツカー部が山口、根岸兩教授の所に集つてゐるがこいつは……なんて考へてみると、とたんに風邪にかゝつて床についてしまつた。やつと全快したので悪筆を振つた次第。やはり僕は部生活とは離れられんらしい。

僕は商大サツカー部の一員なのだ。

部はプレーする所ではない。道場なのだ。

今後六年間必ず熱と意氣とを以て、精神的自己完成に精進する覺悟です。

入部雑感

山田久寧

一
大分時機を過ぎた頃誰の推めでもないのにヒヨツコリと入部した。一體何が僕をして入部せしめたか。この疑問を解決すべく二箇月休暇前に溯る。

七月の語學試験も過ぎた頃寮生慰安として寮對抗の試合があつた。この時僕はルールも何も知らないのにハーフとなり廻る快味を始めて知つた。何とその壯なる事よ。何とその男性的なる事よ。一度その力を知つた僕は日一日とサツカー戀しの思ひを、募らせるだけだつた。折も折父に「體

を丈夫にしろ。ヒヨロ／＼の體では實社會の落伍者だぞ」と云はれて益々サツカーに對する愛戀の情に拍車を加へた。かくて僕は入部した。本科へ進んでからの激烈な勉學に且つ實社會へ行つてから最後の勝者たるに堪へる體格を作らんが爲に。

二

合宿をしてみて、大體部の人の個性を發見し得た。従つて部員の構成するサツカー部そのものゝ空氣も知り得たと思ふ。僕はサツカー部に最後の安住所を見出す前には水泳部、庭球部、少し性質が違ふが語學部に籍を置いたが皆部人より受ける感情の不愉快なので退部した。○○部はエロ漢が多く、××部、□□部はフニヤ／＼の意氣地無しといふ様な氣がした。それに反してサツカー部には眞面目な人が多いと思ふ。殊に本一の人達の眞面目さは實に嬉しくなつてしまふ。

グラウンドに出てからも何一つ出來ない僕に指導して下さつた事は僕の嬉しかつた第二の事實である。

サツカー部よ「永遠に眞面目に眞剣なれ」

昭和十一年度試合戦績

○四月三十日 (木) 對明治大學

於代田橋 午後三時 商大先蹴

明大4(22-10)0 商大

大掛田枝井井

大林浅荒村 後藤西崎

商大 早野鈴木

F.W H.B F.B G.K 吉澤

大山田岡島山片中朴杉 鈴石松井出

大明大 田中 井黃

此の試合、我軍バラ／＼な試合振りで失ふ。此の苦い経験から、皆が今の蹴球部を解散してもやるぞといふ氣概を持ち、從來の醜い態度を捨て、赤裸々の氣持で部を再建する事を誓つた。春以來すつと浮ついた氣分を此所で一掃した。

○五月九日 (土) 豫科對東京高校 午後三時

於東高グランド (六十分ゲーム)

商大1(10-10)0 東高



○五月十六日 (土) 豫科對早高

於東伏見グランド (豫科リーグ)

商大2(02-10)1 早高 (七十分ゲーム)

大商大 山尾瀬井田 堂

米池菅金山 二荒堀

H.B F.B G.K 吉澤

大商大 藤井 堀江

林邊高橋舟西

高橋中渡

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

高橋

此の試合、我軍バラ／＼な試合振りで失ふ。此の苦い経験から、皆が今の蹴球部を解散してもやるぞといふ氣概を持ち、從來の醜い態度を捨て、赤裸々の氣持で部を再建する事を誓つた。春以来すつと浮ついた氣分を此所で一掃した。

此の日、豫科の出足鋭く。敵のフォアワードのコンビ不調に乘じよく潰し。五分池尾のシユートが左隅を割る。十分には菅瀬のノーストップで引掛けたシユートが決つて早くも二點のリードを奪ひ、後半敵の猛攻をバツクよく死守して一ヶの差にて勝つ。昨年の復讐を遂げた。

○五月二十一日（木）對早大

商大4-2早大

早大はオリムピックに多數候補選手を出して居る爲にメムバーは豫科リーグの時と殆ど變らず。問題なく勝つ。メムバー左の如し。

○五月二十三日（土）豫科對立教豫科

F.W	H.B	F.B	G.K
水尾瀬井田	階川尾	早野高橋	吉澤
清池菅金山田	荒堀	高橋	

F.W	H.B	F.B	G.K
角田掛枝井井	森西崎	後藤木	狩森
大淺荒村	小岩崎	鈴木	

對立教戦に負けた口惜しさが忘れられず、此の日雨中泥濘の中に拘らず、物凄い攻撃力を示し、近來にない大量得點を上げて勝つ。その結果豫科はA組第二位となる。

○六月六日（土）對慈惠医科大学

（綜合選手権大會第一回戦）

F.W	H.B	F.B	G.K
大田掛枝井井	森小岩崎	後藤木	吉澤
角大淺荒村	後鈴木		

フォアワードに故障者一人、又グランド不得手な爲め思はぬ拙戦をした。

○六月七日（日）對東京蹴球團

（綜合選手権大會第二回戦）

商大4-03延長戦1東蹴

F.W	H.B	F.B	G.K
角田掛枝井井	森小岩崎	後藤木	吉澤
大淺荒村			

○六月七日（日）豫科二軍對東高農林戰
於小平 二時半

F.W	H.B	F.B	G.K
渡邊木石割田山田	片山（茂木）荒川（片山）大上戸（丸山）	早野高橋	吉澤
林大淺荒村	森小岩崎	後藤木	

○六月十三日（土）對早大W・M・W

於代田橋（綜合選手権準決勝）

F.W	H.B	F.B	G.K
大田掛枝井井	森小岩崎	後藤木	吉澤
越邊橋岡松	上柴	高橋	

F.W	H.B	F.B	G.K
大渡高末岡松	野田	上野	吉澤
關吉西			

F.W	H.B	F.B	G.K
早大	上柴	高橋	吉澤
越邊橋岡松	村形	後藤木	

F.W	H.B	F.B	G.K
大渡高末岡松	野田	上野	吉澤
關吉西			

F.W	H.B	F.B	G.K
早大	上柴	高橋	吉澤
大渡高末岡松	村形	後藤木	

前半風下で苦戦を續け、前半末岡のブツシューで一點入れられ、後半は一進一退でそのまま終るかと思はれたが、あと五分といふ時に村井のシユートが綺麗に決つた。その氣と弛んだ爲か、あと一分半といふ時に末岡に單身ドリブルで抜け、フリーのクリーンシユートされて終る。

○六月十九日（金）豫科對専門部

立教	オ代表6(33-01)1商大
二宮藤	加澤蜂谷上
二加澤蜂谷上	岡田内藤
岡田内藤	岡本野
岡本野	岡崎

○五月二十九日（金）對オリムピック代表

於碑文谷勸銀グラン

商大	角田掛枝井井
大淺荒村	森西崎
森西崎	後藤木

商大	加茂(弟)竹腰西邑
(川本)松永加茂(兄)	高橋西邑
高橋西邑	鈴木種田立原

商大	鈴木種田立原
(笠野)	(笠野)
(笠野)	竹内江

商大	佐野
8(44-00)0慈大	(不破)
(不破)	吉澤

F.W	H.B	F.B	G.K
清水尾瀬井井櫻	二階堂	鈴木種田立原	吉澤
清池菅金山田	荒堀	立原	

F.W	H.B	F.B	G.K
渡邊木石割田山田	早野高橋	竹内江	吉澤
林大淺荒村	後藤木	佐野	

F.W	H.B	F.B	G.K
渡邊木石割田山田	早野高橋	吉澤	
林大淺荒村	後藤木		

立教	オ代表6(33-01)1商大
二宮藤	加澤蜂谷上
二加澤蜂谷上	岡田内藤
岡田内藤	岡本野
岡本野	岡崎

我軍元氣に戦ひ互に一進一退を續けたが後半直後五分に入れられた一ヶが物を云ひ、我軍焦り氣味な爲、タイムアツプ直前に又入れられ、遂に無念の涙をのむ。

於小平 三時半

豫科 1(01 11 10) 1 専門部

清池菅金吉

水尾瀬井田

階川尾

二荒堀

早野高橋

堂

早野高橋

狩森

F.W

H.B

H.B

K.G

浦高

清水屋瀬井田

二荒堀

早野高橋

狩森

G.K

F.K

C.K

B.H

高橋

神谷島

岡本

13 7 2

12 4 2

デイングに決める。十三分村井のセンターリングを林田決める。二十五分に村井のドリブルで抜き、自身でシュートして見事に決る。6-3でこのまま押切るかと思つたが最後に敵のコーナーキック風に乗つて入り6-4にて遂に凱歌上る。

○十月四日 (日) 対慶應戦 (リーグ第二戦)

於東高グランド 主審井出氏

慶應

猪俣宮田磨崎

川元藤

伊藤川

津田

F.W

H.B

F.B

G.K

C.K

F.K

24 6 5

16 9 2

13 7 2

12 4 2

11 9 0

早野の早大戦の負傷直らず、高橋が代つてよく駿足駒崎を抑へたが、遂に大敵に零敗した。此の試合去年も、今年も豫定日には行はれず、去年と同じ様な経過を辿つて敗れたのは如何なるわけか。

○十一月一日 (日) 対農大戦 (リーグ第三戦)

於帝大球場 二時半 主審大村

商大 3(30 11 02) 2 農大

行ひ、互に秋を誓ふ。

○九月十七日 (木) 対一高戦

於府立高校グラウンド

商大 5(14 11 10) 1 一高

林井枝掛井

森西藤

早野鈴木

山内平井

G.K C.K F.K

11 9 0

今迄対立して居た専門部と、今後圓満にやつて行く爲に枝村さん等の努力によつて、此の試合を舉行し対立を和解した。

○六月二十七日 (土) 対浦和高校

於浦高 (第十五回定期戦)

商大 2(20 11 00) 0 浦高

清水屋瀬井田

二荒堀

早野高橋

狩森

F.W

H.B

F.B

G.K

13 7 2

12 4 2

11 9 0

劣拙なる審判、下等なる野次を以てしても四年振りの春の完勝である。

此れにて春季シーズン終り、春季納會を七月四日(土)に

○九月二十六日 (土) 対早大戦 (リーグ第一戦)

於神宮競技場

早大先蹴

濱田氏主審

商大 6(33 11 31) 4 早大

中渡岡橋大越

關野吉西村

上野柴田

吉澤

村形

F.W

H.B

F.B

G.K

13 7 3

12 4 2

11 9 0

雨中戦の前半をよく抑へ、六分荒井、十六分大掛、三十三分森田と皆ロングシュートで決めた。後半は風下に陣したが、九分にはゴール前飛球を荒井、浅枝共に飛び込みヘツ

大事の一戦故若い豫科生冷靜を缺き、早野、吉澤が前送球を衝突して、大野に無人のゴールを割らる。我軍盛に敵陣を破るがシュートが外れ、反つて二十分に尹にシュートされ、2-0とリードされて前半を終つた、後半に至り三分荒井の綺麗なドッヂングからのシュート見事に決り、十分浅枝、大掛へのバスし、此をセンターリングすれば村井之を決め同點にする。二十三分金井のシュートは弱い球勢ではあつたがブレインドをつき決つて逆にリードし、其の後一進一退の中に終る。

○十一月八日 (日) 対帝大戦 (リーグ第四戦)

於和泉 三時商大先蹴

主審伊藤氏

帝大 3(12 11 00) 0 商大

德河沖阿潮田

森菊種池田

藤築岡島

高橋

F.W

H.B

F.B

G.K

C.K

F.K

14 7 5

大商掛井枝井大荒淺金村田森小後野木澤早鈴吉3175
グラント泥濘の爲、村井、金井のフリーシュートのチヤンスもあつたが、此等が悉く或は正面、或はバーを掠め去つた。それ故輕量の我軍には時の經過と共に不利となり二十分F.B.の顛倒のすきに阿部にシユートさる。四十分左コナーキックを阿部にヘッドで決めらる。後半十二分三十分より種田ロングシュートはグン／＼のびて左隅を破り3-0と離された。その後は敵の攻防に阻まれ遂に涙を呑む。

			豫科					
清水		F.W	中大	井	豫科2	0	中央	於高圓寺グランド
松岡			中具	昌				一月十五日
池尾			李	輝				(日)
吉田			波					豫科對中央大學
櫻井								
二階堂		H.B	加藤					
片山			山崎					
堀尾			内藤					
高橋		F.B	金					
荒川			武田					
狩森	G.K		曾我					
18	G.K							
4	C.K							
0	F.K							
				8				
				4				
				0				

○十一月二十二日(日) 對松本高校戰
於小平 三十分ハーフ 十時半開始

卷之三

卷之三

澤負傷に拘らず健闘したが、後半バツク崩れて思はず大敗を喫す。L・I 荒井の病氣、小西の負傷と不運が續いたと云ふ、最後の試合で大敗、誰もこれで失つたのは幾念であら

はいへ、最後の試合を大きく離れて失ったのに残念である。

此れで、りんく軍を絶つし、か、絶えは
1、早大 2、慶應 3、文理大 4、帝大及び商大

十一月二十九日(日)音和對耳門部
於小平 十時開始 三十五分ハーフ
豫科 10(34)11022 専門部

事門部
井出田西種石吳
白井佐藤中田
田崎大木
鈴木
11
2
1

■
F.W
H.B
F.B
G.K
G.K
C.K
F.K

豫科	
清水	
松岡	
池尾	
鈴木	
吉田	
二階堂	
宮崎	
荒川	
堀尾	
高橋	
狩森	
	8
	1
	1

○十二月五日（土）對浦和高校定期戰
於小平二時半開始主審伊藤氏

浦高			
F.W	{ 小野 奥島 川加 有馬 木鈴	豫科	4 (13 10) 1
H.B	{ 松村 川西 淵上		浦高
F.B	{ 土屋 川島		
G.K	岡本		
G.K	21		
C.K	7		
F.K	3		

G.K 21
C.K 7
F.K 3

十二月二十五日（金）豫科對專門
於和泉高商大會第一戰

澤負傷に拘らず健闘したが、後半バツク崩れて思はぬ大敗を喫す。L・I 荒井の病氣、小西の負傷と不運が續いたとはいへ、最後の試合を大きく離されて失つたのは残念である。

専門書	
W	{ 井出 西田 種倉 石河 吳
B	{ 白井 佐藤 中田
B	{ 田嶋 大木
K	鈴木
K	11
K	2
K	1

豫科	
清水	
松岡	
池尾	F.
鈴木	
吉田	
階堂	H.
宮崎	
荒川	
堀尾	F.
高橋	
狩森	G.
	8 G.
	1 C.
	1 F.

○十二月五日（土）對浦和高校定期戦

於小平二時半開始主審伊藤氏
豫科4(13日10)1浦高

浦高	
W	{ 小野 奥島 加川 有馬 鈴木
.B	{ 松村 川西 淵上
B	{ 土屋 川島
.K	岡本
4.K	21
2.K	7
1.K	3

はいへ、最後の試合を大きく離されて失ったのは残念である。

此れで、りんく軍を絶つし、か、絶えは
1、早大 2、慶應 3、文理大 4、帝大及び商大

十一月二十九日(日)音和對耳門部
於小平 十時開始 三十五分ハーフ
豫科 10 (34 11 02) 2 専門部

事門部
井出田西種石吳
白井佐藤中田
田崎大木
鈴木
11
2
1

■
F.W
H.B
F.B
G.K
G.K
C.K
F.K

豫科	
清水	
松岡	
池尾	
鈴木	
吉田	
二階堂	
宮崎	
荒川	
堀尾	
高橋	
狩森	
	8
	1
	1

○十二月五日（土）對浦和高校定期戰
於小平二時半開始主審伊藤氏

G.K 1
C.K
F.K

	豫科	水岡尾井田	堂山川	野高橋	狩森	11 6 2
F.W	{	清松池金吉	階片荒	早高橋		
H.B	{	大渡松池金吉	堂二片堀	早野高橋		
F.B	{	商大邊岡尾井田	高野吉澤			
G.K		13	2	2		
G.K						
C.K						
F.K						

豫科4(40 11)2松高							
○十一月二十八日(土)對文理大戰(リーグ第五戦)							
商大	松高						
清水岡尾井	土屋	中藤井					
松池金吉	原	田加金					
二階堂片山尾	河鍋	内貢山本					
高橋荒川	大貢	石田島					
狩森	中島	松下					
於和泉主審伊藤氏	F.W	H.B	F.B	G.K			
文大7(52 11)2商大							
文大	商大						
長島下永崎川	F.W						
久松原小川							
木村田下	H.B						
木藤木							
三塚阿部	F.B						
中垣内	G.K						
吉澤							
早鈴木							
吉澤							
掛枝田井井							
大淺角金村井							
森片後藤							
吉澤							
C・H小西傷癒えず新人片山出場。R・I荒井病の爲缺							
場。四分、松永のシュートに一點先取せられたが、その後直ちに後藤よりの送球を浅枝、角田と渡り角田のシュート綺麗に決つた。その後三十分ペナルティライン附近の飛球に吉澤、長島衝突し顛倒する間に原崎にシュートさる。吉							

本科勝數七 敗數七
豫科勝數十三 敗數一 引分二

得點に於ては

本科三十三——四十で敗

豫科五十六——十六で勝

尙高商大會の組合及び結果は左の如し。

豫科
(3)豫科 二十七日
(1)福島高商 二十六日
(7)福島高商 同
(1)横濱高商 同
(2)横濱商專 同
(2)専門部 25日
(4)福島高商
(2)大倉高商
(4)大倉高商
(7)豫科

(0)高千穂高商
(5)東商豫科
(3)大倉高商
(4)大倉高商
(1)福島高商
(2)福島高商
(1)福島高商
(2)福島高商
(7)豫科

○四月二十四日 (土) 對慶應戰
於日吉 二時半 慶應先蹴
慶應4(13||20)2 商大
商大 清水掛田尾井
商大 賀瀬松岡片山木吉田
(櫻井)堀尾荒川
(早野)岩崎
(石割)宮崎高橋
H.B F.W
H.B F.B
F.B G.K
G.K 吉澤

續いて二軍同志の試合を行ふ。
商大二軍3(21||12)3 慶應二軍
商大5—3 早大
商大 清水掛田尾井
商大 賀瀬松岡片山木吉田
(茂木)堀尾荒川
(早野)岩崎
(石割)宮崎高橋
H.B F.W
H.B F.B
F.B G.K
G.K 吉澤

○四月二十九日 (木) 二軍對早大留守軍
於東伏見

○五月一日 (土) 對文理大戰
於本鄉中學
F.W
H.B
F.B
G.K 犬森

○五月九日 (日) 對明大戰
於東高 総合選手權大會第一回戰 十二時キツクオフ
商大1(0010||0001)1 明大 (抽籤勝)

W.F
H.B
F.B
G.K 佐野

早大 加茂(兄)高橋邊邑茂(弟)關野金
早大6(42||00)0 商大

○五月十六日 (日) 對早大戰
於和泉 総合選手權二回戰

風下に陣したにも拘らず我軍は再三好機を得たが決らず反つて十五分敵のチャージボールがバウンド高く吉澤の頭を軽く越えて、飽氣なく取られた。そのまま後半に迄持越し二十五分清水のセントーリングが敵の足に當つてゴールインで辛くも同點となり、延長戦となり、盛に押すも決らず決局抽籤勝となる。明治としてはシューートらしもきのは一本に過ぎず、もう少しこちらが作戦をうまくすれば、絶対的に勝ち得べき試合だつた。

昭和十一年春季戰績

主將鈴木が前試合の明大戦より腹痛のため試合に出られず、高橋が代つて出る。それにC・H小西迄氣管支炎で缺場の爲、ベストメムバーで強敵早大に對戦出来なかつた。しかし得點の開き程試合の内容が慘たるものでは決してなかつた。

○五月十八日（火）豫科對中央豫科戰
於高圓寺（豫科リーグ第一戦）
商大4(22||10)1 中央

大 清水掛田	大 清水掛田金村
商大	二階堂野崎
(林田)菅瀬	後藤橋
(櫻井)林田尾	吉澤
(金井)池村井	

○六月四日（金）豫科對慶應豫科
於和泉豫科リーグ第三戦
商大4(31||11)2 慶應

大 清水岡山井田	大 清水岡山井田金吉
商大	F.W H.B
(松島)片金吉	F.B G.K
(宮崎)堀早荒	
(高橋)宮崎	
(吉澤)吉澤	

二年連續敗れた屈辱に憤起した豫科軍最初からぐんぐん押し、遂に完全に復讐を遂げた。C・Fとしてリーグ戦初登場の片山のシューートは物凄かつた。バツクの潰しも早く問題なく片附けた。

○五月三十一日（月）豫科對立教豫科戰
於石神井三時半 商大先蹴（豫科リーグ）
商大6(33||10)1 立教

大 清水岡井木田	大 清水岡井木田
商大	F.W H.B
(松島)堀早茂	F.B G.K
(宮崎)宮崎橋	
(吉澤)吉澤	

敵のフォアワードを我がバツクは問題なく守つたが、味方のフォアワードの動き迅速なれば、もつと得點出来たもの。記念祭を前日に行つたゆるみか。

○六月十二日（土）豫科對浦和高校戰
於浦高（第十七回定期戦）
商大2(02||10)1 浦和

大 清水岡山井田	大 清水岡山井田
商大	F.W H.B
(松島)片金吉	F.B G.K
(宮崎)堀早荒	
(高橋)宮崎橋	
(吉澤)吉澤	

大掛の負傷等あつて支離滅裂の攻撃ぶりにて敗る。

てよく抑へたと見えた時腰を蹴られて倒れ、留守のゴールを決めらる。

後半開始直後、片山ハーフを抑へながら單身持つて行きゴール前のつぶしをかはしてシユートがブライドをつき、リードしたが、その後大きなチャージ、ボールが風にのり吉澤のジヤム間に合はず同點となる。十五分片山、吉田とボデショーンチエンジして、右より大きくセンターリングすれば、G・K津田の手をかすめて、ポスト、バーと當つて入り、續けて又左から出したボール轉々とする所金井クリーンシユート鮮に決る。それより敵あせり出し、押し切りに攻むれど決定的チャンスを與へず、バツクの好防に終る。堀尾が脅威二宮を殆ど完全にマークした。未だ破つた事のない慶應を始めて豫科の手で破る。

○六月九日（水）對帝大戰
於本郷帝大球場

帝大3(21||00)0 商大

F.W

H.B

F.B

G.K

商大

(林田)菅瀬

大掛

(櫻井)林田尾

村井

小西

岩崎

二階堂

後藤

鈴木

吉澤

○六月二十日（日）豫科農大豫科
於和泉（豫科リーグ決勝戦）
商大4(22||11)2 農大

大 清水岡山井田	大 清水岡山井田
商大	F.W H.B
(松島)片金吉	F.B G.K
(宮崎)堀早荒	
(高橋)宮崎橋	
(吉澤)吉澤	

F.W

H.B

F.B

G.K

農大

佐藤鬼

定大

鈴木

小松

深谷

西川

磯部

佐藤

吉田

黒田

14 G.K10
4 C.K 4
6 F.K 7
1 P.K 1

前半は殆ど五角で戦つて居たが、段々押して来て、片山が相次いで二點を得た。

後半は敵軍猛烈なファイトによつて攻め立てゝ我軍立直る隙も與へず、敵のインナーに一點入れられたが、バツクの死守によつて最後の一點を守る。豫科の今春の一番心膽を寒からしめた相手であつた。

前半、吉田のセンター・リングを清水極める。次にゴール前の敵方ハンドによるP・Kを金井右隅に極めたが、農大もその後押し返し我ゴール前の混戦中吉澤がよく球を出したが審判にハンドと見誤れて取られる。明にミスジャッジである。

後半吉田グン／＼中へ持ち込み、小さく返せば金井のクリーン・シュート見事に決る。續いて金井が右に出て、センターリングすれば清水の出足よくヘッドで止めを刺す。農大は逆襲による一點を得たのみ。

参考の爲、朝日新聞に出て居た大橋正路氏の批評を書いて見る。

豫想外のチームが決勝に残り、例年にくらべ貧弱なる決勝戦であつた。然し商大は全體によく纏り、そのF.W.はスピードとコンビネーションに農大に勝り、殊に右翼三人片山金井、吉田が好く、商大がものにした三ゴールに全部重要な役割をなして居た。農大は體力とファイトで商大を壓して居たが、F.W.は纏り悪く、又單調なる攻撃に終始し、前半に得たP.K.の外は後半三十一分に商大の疲労に乗じて漸く一點を得たのみ。結局は商大の頭脳的なプレイがファイター農大を制したもので、順當なる結果と云へやう。

此の試合を以て春のシーズン終る。
七月三日(土)に春季納會を「よろづや」に開く。



一橋蹴球部部員名簿錄

(昭和十二年八月現在)

編輯部調査

大正十五年

松本正雄

杉並區西高井戸一ノ一三
東京市京橋區銀座西一丁目實業ビル内九
花岡法律事務所(電)京橋六〇八六

大森區田園調布四ノ二

川村通

調布高等女學校(電)田園調布八三五

麻布區廣尾町(電)田園調布五二七

麒麟麥酒株式會社(電)京橋六、一二九

明石通

高橋朝次郎

明石通

北原義人

兵庫縣武庫郡東芦屋藤ヶ谷莊園

大正十四年度卒業

先輩

(右勤務先所)

進藤靜太郎

(左勤務先所)

大正十三年(専)

c/o 10 Osaka Shosen Kaisha Ltd.
Comnaught Road, Central, Hongkong.

兵庫縣武庫郡住吉村反高林一、八七六
大阪市北區東梅田町二一八
(電)御影五、六七八
ス合資會社進藤商店(電)北、一〇二九

石 割 記

して見たかつたが時間の不足から、合宿の記事さへも出せなかつた。



新入生諸君が栗原君を除いた全部の人が原稿を出して呉れたのには感謝する。

熊澤兄が部を去られて残された部誌編輯の事を部から私に託されたが、未だ経験なき私にどんなものが出来るかと心配して居たが、幸ひ先輩田島氏からお忙しい所をわざく色々御指導をたまはつて漸く作り上げたのが此の部誌である。不行届の點は未熟者として御寛恕を願ひます。毎度の事ながら、今年はかういふ事情から發行の遅れた事も

平に御容赦下さい。



吉田、高橋の諸君の原稿が遂に三週間程期待してたが見られなかつたのは残念だ。部誌には毎號全部員が一筆書く様にしたいものだ。(かういふ私も初見參者ですが)

豫科二年生、片山、宮崎、松岡、櫻井、豫科三年の清水、

島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。



島兄、熊澤兄の努力の結果である。そういうふ譯で今度の自分

の編輯の拙劣さから此の部誌が無味乾燥になる事が非常

に恐ろしい。

